

---

# ROCKMAN EXE ~ After Road ~

MATSUTETSU

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ROCKMAN EXE\After Road\

### 【コード】

N4964Q

### 【作者名】

MATSUETSU

### 【あらすじ】

これは熱斗とメールが結ばれるまでの様々な物語。

## E p i Spring Heart

熱斗達が中学校に入学して3年後・・・流れるように時は過ぎていた。

メイルと熱斗は自宅近くのデンサン高校、デカオはジョーモン街の高校に、やいとはアメロッパの高校に進学が決まっていた。しばらく会えなくなる事もあり、互いの卒業式の後にやいとの家に集まっていた。

熱斗「こうやって集まるのも久しぶりだなあ」

メイル「確かに中学入る前は毎日みんなでいたのにね」

デカオ「まったくくだよな、でもこうしていると昔と全然かわってねえな」

やいと「ええ、特にあんたわね。」

アハハハハハハ！！！！

熱斗「だけど変わった事もいろいろあったよなホントに」

熱斗の言う通りこの3年間で周りは色々な変化があった。

一番変わったのは犯罪の数である。熱斗達の活躍もあって犯罪の数は減ってきている。WWの壊滅もあってウイルスの衰退の様子が最近見られている。

そしてもう1つは友人関係にある。

この3年間でジャイロマンのオペレーターのチャーリーとマグネツトマンのオペレーターのステラが結婚した。現在ステラは一児の母で幸せな家庭を築いている。

また結婚したのは一組だけではない。

ナイトマンのオペレーターであるブライドはライカと、ヒグレヤの日暮さんはまり子先生とやっとゴールイン。マサさんは実はとっくに結婚していた。

こうしてみんなで雑談していくうちに日が暮れる時間になり、互いを励まし合いながら4人は解散した。

Ep.2 Spring Heart 2

．．．その夜メールはいつも通りやいととチャットをしていた。

やいと「で、どうなのよ光君との仲は？」

メール「え？、あ、うん／／／／」

やいと「告白は？」

メール「．．．まだ．．．／／／／」

やいと「．．．たく、そんな奥手だと告白出来ないまま離ればなれになっちゃうわよ」

メール「何度もしようとはするんだけど熱斗を前にしちゃうと．．．何か緊張しちゃって／／／／」

やいと「うん（ ； ； ）．．．とにかくチャンスは絶対逃しちゃうだめよ！メールちゃんはメールちゃんの気持ちを素直に伝えるのよ！大事なのはその時の気持ち！」

メール「その時の気持ち．．．」

やいと「そう。メールちゃんは光君の事をどう思ってる？」

メール「．．．好き／／／／」

やいと「だったらその気持ちを素直に伝えるの！いい？」

メール「……うん／／／／」

やいと「別に急ぐ事はないわ。同じ高校なんだもの、メールちゃんのタイミングで行けばいいのよ。」

メール「……やいとちゃん、私すぐには出来そうにはないけど……頑張ってみる……いつもありがとう……！」

やいと「どういたしまして その意気よ！頑張ってメールちゃん！」

こうして今日の2人のチャットはお開きとなった。互いを励まし合いながら4人は解散した。

Ep.3 Spring Heart3

メールとやいとがチャットをしている同時刻熱斗は・・・

熱斗「・・・はぁ・・・」

ロックマン「どうしたの熱斗君？帰ってきてからため息ばかりついて・・・」

熱斗「いや・・・なんでもない・・・はぁ」

ロックマン「もしかして、恋の病ってやつ？」

熱斗「え！？は！？な、なにを言ってるんだロックマン！？そ、そんなわけないだろ／／／／」

ロックマン「ねつとく〜ん、顔が赤いよ〜」

熱斗「う、うるさい！別に何でもないよ！俺は寝る！／／／／」

ザバツ！

そうして熱斗は眠りに入った。

自分の素直になれない気持ち、伝えたくても伝えられない自分に熱斗は悩んでいた。

咲き悩む蕾のように・・・

Ep. 4 Summer of Love (前書)

Summer of Love

Ep. 4 Summer of Love

季節はながれて高1の夏休み。 やいとの呼び掛けもあって4人はハワイ旅行に来ていた。

熱斗「相変わらずやいとの家はジェット機やらなんやら何でもあるな」

メイル「さすが綾小路財閥ね・・・」

デカオ「ホントに、腰が抜けちまうよ。」

やいと「この位は普通よ」さあみんなで遊びましょ！」

そうして4人はビーチで思う存分遊んだ。 最後には遊び疲れて熱斗とデカオはビーチベッドでぐったりしていた。

デカオ「熱斗、そっち勉強はどうだ？」

熱斗「高校になってから一層に難しくなった、大変だよ」

デカオ「こっちもだ、お互い苦勞してるな」・・・ところ  
でメイルちゃんとは上手くいってんのか？」

熱斗「い、いきなり何をいいたすんだよ!？」

デカオ「別に驚く事じゃねえだろ、メイルちゃんの事好きなんだろ」

熱斗「べ、別に好きなんかじゃねえよ！／＼／＼／」

そう言っただけで熱斗は場を立ち去ってしまった。

デカオ「……まったく、素直じゃねえな」

Ep. 5 Summer of Love 2

その頃、やいととメイルはホテル近くのショッピングモールに来ていた。

やいと「この服とかどう？」

メイル「凄く似合ってるよ、可愛い」

やいと「メイルちゃんも似合ってるわよ、これで光君もイチコロねっ」

メイル「もっやいとちゃんったら〜／／／／」

やいと「あはは、ごめんごめん」

そんなやりとりをしながらファーストフード店に到着。2人は互いの話をするようになった。

メイル「ねえやいとちゃん、炎山君とはどうなの？」

やいと「！！！！ゲフッ！ゲフッ！いきなり何いいますのよ〜！／／／／」

やいととはメイルの発言に驚き、ファーストフード店で食べていたア

イスを吹きそうになった。

メール「ごめんごめん（^人^）」

やいと「・・・今はまだメールする位の仲よ、あっちもあっちで忙しいし・・・」

メール「メールするって事は・・・もしかして・・・！」

やいと「・・・ええ、そうよ。あっちからだったわ。にしても随分無愛想な告白だったわよ。いきなり付き合えだなんて、冷静な顔付きだったけど顔は真っ赤になってたわ」

メール「でもそれだけやいとちゃんの事を大事に思ってるからなんじゃない？」

やいと「・・・だといいな・・・// // //」

その時やいとの不機嫌そうな顔には、少し物欲しげで切なく、少々赤い表情が浮かんでいた。

やいと「それはともかく、そっちはどうなの？進展はあった？」

メール「あんまり、いつも通り一緒に家に帰るくらいだよ・・・でも何だろ・・・時々熱斗が私を守ってくれる時がある// // //・・・気のせいかな？」

やいと「多分気のせいじゃないわ、だって光君昔からメイルちゃんを守る事に必死だったじゃない、暴走したバスや電車にメイルちゃんが乗ってた時なんか、必死にウイルス探しだしてデリートしてくれたじゃない」メイルちゃんの危機ほど光君が焦るこのないもん」

メイル「あの時は大変だったわ」止まって熱斗を見た途端抱き付きちゃったもん」

やいと「メイルちゃんは光君に抱き付くの好きね」(´、´)「

メイル「べ、別にそんな事ないもん!!!ただ身体が勝手に……  
／／／／／／」

やいと「それはそれで良いと思うわよ」

メイル「……ありがとう／／／／／」

そうして2人はホテルに戻った。

Ep. 6 Summer of Love 3

やいと「ちょっと炎山からメール来てるから先ホテル行つてて」

と、2人がホテルに向かう途中やいとは炎山からのメールで別行動となった。そうしてメールはホテルに向かった。デカオはホテルのコックさんとカレーについての話し合いをしているらしい。一方熱斗は部屋で水着のまま寝ていた。

メール「ったく、そんな格好じゃ風邪ひいちゃうよ」・・・

メールが寝ている熱斗に巻きタオルを掛けようとした時、熱斗の身体が目に入った。

全身が古い傷だらけでいくつもの傷跡が残っている。  
WWWやゴスペル、ネビュラとの戦いの中、無傷でいられるはずはなかった。

熱斗が何回も病院に緊急搬送され、生死の境をさまよったのをメールは知っていた。

熱斗の全身の傷を見ているとメールは自然に涙が止まらなくなってしまう。

メール「・・・グスツ・・・ごめんね・・・熱斗・・・いつも・・・



10

Ep. 7 Summer of Night

まあそんな事もありながら時刻は夕方頃になり、みんなでホテルの夕食を食べていた。

やいと「!?このカレー・・・美味しい・・・!」

メール「確かに・・・他の料理から群をぬいてるわ・・・同じ人が作ったとは思えない・・・」

熱斗「・・・この味付け・・・デカオだな・・・!」

デカオ「その通り!午後にごこのコックのオーナーにカレーの味付けを教えてたんだよ。・・・にしてもよく分かったな」

やいと「確かに・・・よく分かったわね」

メール「熱斗すごい・・・」

熱斗「まあいつもマハ亭で食べてるからなあ」

そんなことで夕食も済まし、各自別行動に入った。デカオはコックのオーナーと味付けの相談、やいとは炎山とのメール、熱斗はお風呂、メールは部屋で明日の帰国の準備をしていた。

ロール「夜の景色も綺麗ね」

メール「そうね〜こんな高い所から海が一望できるなんて、めったにあることじゃないわ」

ロール「確かこんな綺麗な空の時だったよね、鍵無くして困ってた時」

メール「あつたわね〜あの時は大変だったわ」

メールが言う「あの時」とは、メールが自宅の鍵を無くしてしまった時の事である。実際家の鍵は電子化しても良いのだが、ハッキングされる危険があつたのであえてメールは電子化していなかった。しかしメールはその日に鍵を無くしてしまった。

ロール「家に入れなくて路頭に迷ってた時、熱斗君が入れてくれたのよね」

結局メールは鍵を無くし自宅前で座り込んでいた。その時助けられたのが熱斗だった。その日はママもパパもいなくて、熱斗が家番をしていた。

メール「あの時は本当に野宿を覚悟したわ・・・」

熱斗はメールを自宅に入れ彼なりに気を遣ってくれた。晩御飯はママが作っておいてくれた料理をご馳走して、パジャマはママが昔着ていたものを貸してくれた。

メール「結局ベッドまで貸してくれて、あの時はホント嬉しかったなあ」

この時熱斗はメールに自分のベッドを貸し、熱斗は部屋の床に布団を敷いて眠りについた。

ロール「結局鍵はポケットの奥にあったんだよねえ」メールちゃん  
ホントおっちょこちょいなんだから」

メール「あゝ思い出させないでえゝ／／／／／／」

Ep. 8 Summer of Night 2

メイルとロールがお喋りしてるうちに熱斗が帰って来た。

ガチャッ

熱斗「ハア〜いい湯だったあ（＊ ＊）」

メイル「おかえり〜随分長かったわね〜」

熱斗「いや〜なんか風呂で燃次と会ってサウナで我慢勝負になっちゃってさ」

メイル「燃次さんが？奇遇ね〜こんなところで会うなんて」

燃次はナパームマンのオペレーターで熱斗達と同じデューオに選ばれた戦士の1人である。

熱斗「まったく．．．相変わらず大変だった．．．まあ色々話して楽しかったよ」

そういうと熱斗は自販機で買った飲み物を1つメイルに渡して、ベツドに座った。

メイル「熱斗・・・身体の傷大丈夫？」

熱斗「ああ、こんなの全然大丈夫だよ」

メイルの心配に対する熱斗の返答は思ってた以上に軽く、無性にメイルは腹立たしくなってしまった。

メイル「・・・熱斗のバカ!!」

と同時にメイルはいきなり熱斗の胸元をパンチした。予想外のパンチに熱斗は避け切れずもろに受けてしまった。

熱斗「ぐはっ!・・・何するんだよ!？」

メイル「熱斗のバカ!!なんで皆を守って自分を守らなかったの!？」

熱斗の胸元を叩きながら訴えるメイルの目にはうっすら涙が浮かんでいた。

メイル「そんな傷だらけで、大丈夫なわけないでしょ!?!いつも私

達の遠くで戦っては傷だらけで帰って来て・・・今までだっていつ死んでもおかしくない状況だったのよ!？」

熱斗の胸元を叩きながら訴えていたメイルの手が止まった。

メイル「・・・もし熱斗が死んだら、取り返しつかないんだよ?なんで自分を守るうとしなかったの?」

熱斗「・・・」

メイル「逃げようと思えば逃げられたでしょ?それに事件だったらオフシャルに任せれば良かったのに・・・私、熱斗が死ぬなんて嫌だよ・・・」

熱斗「・・・確かにオフシャルに任せれば事件にまきこまれないし、逃げたければ、逃げればいい」

熱斗の胸元に頭をつけるメイルに熱斗はそつと腕を組んだ。

熱斗「・・・でもいつかオフシャルが太刀打ち出来なくなる敵も出てくるかもしれない・・・それに身近な人が傷つくのを俺は見えていない・・・」

メール「……!」

熱斗「結局は誰かやらないといけなかったんだ。大事な人達を守る為だったらこんな傷なんか惜しまないよ」

メール「………バカ……/ /」

言葉とは裏腹にメールは熱斗から離れようとはしなかった。

デリケートでちょっとした事でも壊れてしまいそうな華奢な身体での精一杯の抵抗……熱斗は決して無理に引き離そうとはしなかった。

こうして2人はゆっくりと眠りについた。夜空は燃次の作った色とりどりの花火でいっぱいだった……



熱斗「すみませんでした!!!」

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

熱斗が土下座する度に頭を床に打ち付けている。

メール「ちょ！？ちよつと！？止めて！大丈夫だから！頭おかしくなるよ!？」

メールは必死で謝る熱斗を止めた。

メール「多分私もそのまま寝ちゃったと思うの。まあぐっすり寝れたし、大丈夫」

熱斗「そう？良かったあゝ・・・!!」

その時偶然熱斗の目に入ったのはメールの寝起き姿だった。髪をおろし、パジャマ姿のメールは少し幼い感じを残しながらも、大人の雰囲気漂っていた。

そんな姿を前にして平常でいられる熱斗ではなかった。

熱斗「／／／／／／／／／／／／」

メイル「そんなジーっと見てどうしたの？」

熱斗「・・・ドバツ!!!」

バタツ!!!

熱斗はいきなりもの凄い量の鼻血を出して倒れてしまった。

メイル「熱斗!?大丈夫!?今ティッシュ持ってくるから待ってて  
!!!!!!」

.....

一方隣の部屋ではやいととデカオが2人の会話を盗み聞きしていた。

やいと「まあ大成功なんじゃない？」

デカオ「そうだな!まあ熱斗に何かあったけど」

アハハハハ!!!!!!

こうして4人の夏休みが過ぎていった。

E p i o      F a l l      W i n d (前書)

F a l l      W i n d

Ep.10 Fall Wind

季節は高1の秋

秋原町の自然も綺麗な色を帯びている。

熱斗とメールがいつも通り高校に通っている頃、秋原小学校では . . .

まりこ「あゝ仕事終わったあゝ疲れたあゝ」

マツハ「お疲れさまですまりこ先生。随分疲れていますね」

まりこ「あ、マツハ先生、お疲れさまです。どうです？秋原小学校は慣れましたか？」

マツハ「はい！半年間で随分慣れましたよ」

まりこ「それは良かった 良かったらお茶でも？」

マツハ「ではお言葉に甘えて . . .」

セントラルタウンの才葉学園で働いていたマツハは今年の春に秋原小学校にやってきたらしい。

相変わらずの熱血だがその人柄からですぐに小学校に溶け込む事ができた。

まりこ「にしても光君達、元気でやってるかしら？」

マツハ「そうですね、あいつらが小学校を卒業してもう3年以上経ちましたしね、そういえばこの前コジロウ達からメールが来たんですよ」

まりこ「えーいいいな〜こっちはメールなんか来ませんよ〜」

マツハ「アハハ！まあ皆忙しいんですよ〜！」

まりこ「だったらいいんですが・・・ところでメールの内容は？」

マツハ「将来の夢について書いてありました。コジロウは教師を目指しているらしいです。」

まりこ「ほ〜私達と同じ職業ですか、なんか少し嬉しいですね」

マツハ「全くです！あいつだったらきつと良い教師になりますよ！」

まりこ先生とマツハ先生が教え子の話に花を咲かしている間に綺麗な夕焼け空が出ていた。

まりこ先生が自宅に帰ると夫の日暮闇太郎が夕飯の準備をしてくれていた。

闇太郎「お帰りなさいでマス！夕飯もう少しかかるでマス」

まりこ「分かったわ いつもありがとうm(\_\_\_\_)m」

闇太郎は現在ヒグレヤを世界進出させていて、社長を務めている。しかし社長という立場なので遠くへの出張も無く、大体の時間は家で仕事をしている。

社長の立場上、仕事場が自宅というのはとても珍しい環境のだが、闇太郎はこの感じが気に入っているらしく、まりこが学校に行っている間の家事も彼がこなしている。

当初は家事も何1つ出来なかった闇太郎であったが今ではてきぱきこなせるようになった。

まりこが着替えをしていると一件メールが届いた。

まりこ「メール？メールちゃんから！？久しぶりだわ〜！」

教え子からの久しぶりのメールにまりこはとても喜んだ。

そしてまりこがメールを読み終わった頃・・・

闇太郎「夕飯できたでマスよ〜」

まりこ「は〜い！今行きま〜す」

まりこが部屋からリビングに戻ると、テーブルには美味しそうな夕飯が並べられていた。

まりこ「いただきます〜す」

闇太郎「どうぞでマス。．．にしてもまりこさん、今日はいつもに増して機嫌が良いでマスね」

まりこ「実は今日メールちゃんからメールがあったのよ〜」

闇太郎「それは良かったでマスね〜！」

まりこ「ええ！元気でやってるって書いてあったわ〜。あと熱斗君も元気ですって」

闇太郎「熱斗君もでマスか？」

まりこ「熱斗君とメールちゃんは同じ高校なのよ」

闇太郎「あゝそうだったでマスか！そういうば、あの2人はいつも一緒にマスね」

まりこ「そうなのよでもまだお付き合いしてないらしいのよ」

闇太郎「あんなに一緒にいるのに・・・熱斗君も鈍感でマスな」

まりこ「メールちゃんは奥手だしね・・・まあいつかうまくいくでしょ」

闇太郎「根拠は？」

まりこ「女のカンよ、闇太郎さん」

闇太郎「女のカン・・・でマスか・・・」

そんな話をしながら夕飯を食べた2人は後片付けを始めた。

後片付けを終えた2人はリビングにいた。闇太郎はバトルチップの整理、まりこは闇太郎のマフラーをあんでいる。それでもメールと熱斗の話で盛り上がっていた。

闇太郎「にしても、熱斗君やメールちゃんが一緒にヒグレヤに来てた日々が懐かしいでマス（^-^-）レアチップを前に目を光らせる熱斗君に、その熱斗君を引っ張っていこうとするメールちゃん、ホント懐かしいでマス」

まりこ「熱斗君はネットバトルが大好きだったからね、頭の中がバトルチップでいっぱいだったんだろな」

日暮「でも、一度だけ熱斗君がメールちゃんの為にヒグレヤに来た事があったんでマスよ」

まりこ「...え?...えええ!?!?バトルチップとネットバトルしか頭になかったあの熱斗君が!?!?」

闇太郎「まりこさん...その発言...少し熱斗君に失礼でマスよ」

（^o^）「-」

まりこ「だってあの熱斗君だよ!？どんなことがあったの?」

闇太郎「確かあれは風の強い秋の頃だったでマスな」

闇太郎がいう秋の頃と言うのは熱斗が中学1年の時で、その日メールはある大事なチップを探していた。

それはメールにとって最も大切にしていたチップだった。

しかしその日にメールはそのチップをどこかに落としてしまった。熱斗はメールが何かを探しているのに気づいてメールに話し掛けた。

しかしメールは熱斗に頼ろうとはしなかった。

何故ならそのチップは熱斗からプレゼントされたチップだったのだから……

メールが何かを探しているのを察した熱斗はメールに無理に聞いた  
だそうとはせず自分自身で捜し始めた。

メールの落とし物が分からない熱斗であったが登校通路にある事は  
間違いないと思い学校からメールの自宅前まで隅々まで探した。

しかしメールが落としそうな落とし物は何処にもなく、日も暮れか  
けていた。

諦めかけた熱斗だったがメールの家の前の草の中に何か光るものを  
見つけた。

古そうだったが丁寧に扱った跡が見えるチップで、熱斗も見覚えが  
あった。

しかしそのチップの先端は傷ついていてとてもデータが読み込める  
状態ではなかった。

闇太郎「で、熱斗君がヒグレヤ来たんでマス。あの時の熱斗君といつたら服が汚れでいっぱいだったでマス（＾－＾）」

ヒグレヤに来た熱斗は闇太郎に事情を話し、そのチップの先端を研磨して使えるようにしてもらった。

実は研磨には少しお金がかかるはずだったが事情を聞いた闇太郎はあえてお金の事は何も言わずタダで研磨してあげた。

まりこ「私、やっぱり闇太郎さんを選んで間違ってたわ〜）  
^ ^）」

闇太郎「いや〜照れるでマス（\*ノ \\*）でも研磨が終わった時のあの熱斗君の笑顔といたら、どんなレアチップを手に入れた時よりも幸せそうだったでマス〜（^-^）」

まりこ「で、その後どうなったの？」

闇太郎「研磨が終わった後にメールちゃんをヒグレヤに呼んだのでマス」

研磨が終わったあと熱斗はメールをヒグレヤに呼んだ。

熱斗はメールにそのチップを渡した。

闇太郎「熱斗君の予想通りそのチップはメールちゃんだったのでマス。」

なくして困っていたチップを渡されたメールは泣きながら笑顔で熱斗に抱きついた。

そしてメイルは熱斗の耳元で泣きじゃくった小さな声でいった。

「無くして……ごめん……二度となくさない……熱斗……  
ありがとう……！」

闇太郎「メイルちゃんに抱きつかれた時の熱斗君のあな真っ赤な顔  
といたら……(\*^|^\*)」

熱斗は顔を紅潮させながらもメイルのかすかな声にしっかりと頷いていた。

闇太郎「あの時熱斗君が何に頷いていたかは分からないでマスが2  
人とも幸せそうだったでマス(^-^)」

まりこ「いい話ね(^ ^)……もうこんな時間、そろそろ寝  
なくちゃ！」

そして2人で寝る準備を済まして、それぞれのベッドに入った。

まりこ「ねえ闇太郎さん．．」

闇太郎「．．．どうしたでマスか？」

まりこ「．．さっきの話で熱斗君が持ってきたチップって覚えてる？」

闇太郎「フフツ、覚えてるでマス、むしろ忘れられないでマス」

「＾ノ」

まりこ「え？なんで？」

闇太郎「だってあのチップは大切な人を守りたいという意味を持っているんでマスもの．．あのチップ．．．．．サンクチュアリには．．．」

E p i 4 W i n t e r S i c k (前書き)

W i n t e r S i c k

Ep. 14 Winter Sick

冬の季節

カップルや家族でクリスマスを過ごす人は多く、この秋原町でもそれは例外でもなかった。

やいと「クリスマスに私の家でパーティーやらない？」

それはやいとの提案で始まった。

ある日のチャットにて……

デカオ「パーティーか！？やろうぜ！」

メール「パーティーか……楽しそう」

熱斗「どうせクリスマスはパパもママもないし、だよなロック！」

ロックマン「そうだね！パパもママもその頃海外に旅行に行ってるはずだし」

やいと「光君は行かなかったの？」

熱斗「うん、2人の結婚記念日の旅行だから邪魔しちゃ悪いと思っ

て」

やいと「へへ意外と気が利くわね〜・・・グライド！クリスマスにパーティの予定を建てといて！」

グライド「了解しました、やいと様」

やいと「・・・あと一応炎山にもパーティのメール入れておいて」

グライド「お任せ下さい」

ガッツマン「パーティ楽しみでガスー！」

ロール「ねえ、みんなでプレゼント交換やらない？」

メール「それ良いわね〜 みんなそうしない？」

やいと「いいわね〜 やりましょうー！じゃクリスマスの夜に私の家に集合で」

そんな会話をしてチャットはお開きとなった。

その夜・・・

やいと「ねえグライド、炎山からの返事は？」

グライド「まだ、来ておりません……」

やいと「……やっぱり今年も……」

その時だった。

グライド「……！やいと様メールです！……炎山様からです」

やいと「！！！！！！………お願い……神様……！！！！」

やいと天にも願う気持ちでメールを開いた。

Ep. 15 Winter Sick 2

クリスマス当日・・・

メール「楽しみね〜ロール」

ロール「ええ！早くやいとちゃんの家に行きましょーよ！」

2人はそうして、やいとの家に着いた。

やいと「いらっしや〜い！」

メール「？やいとちゃん今日はいつにも増してげんきだね〜何かあったの？」

やいと「フフツ まあ入れば分かるわよ」

そう言われメールは奥のパーティの部屋に案内された。  
相変わらずやいとの家は凄いのと思いつつ部屋にはいると、中にはデカオと卵の殻を被ったような男の子、炎山がいた。

メール「あれ、炎山君！？お久しぶり！！」

炎山「ああ、久しぶりだな」

メール「（もしかしてやいとの機嫌がいつもより良かったのは・・・なるほど）」

やいと「にしても、光君遅いわね〜何してんのかしら〜」

みんなで熱斗が来るのを待っているとやいととHPに誰かが入ってきた。ロックマンだった。

やいと「ロックマン!どうしたの!?!」

ロックマン「それが……………」

メール「熱斗が風邪!?!」

ロックマン「たいして酷くはなかったんだけど熱が下がらなくて……  
・とりあえず交換に使うプレゼントはやいとちゃんの家が届けてあるっていったけど……………」

やいと「確かにさっき小包が届いてたわ」

ロククマン「それで熱斗君がお前1人でも行けって言われて・・・」  
デカオ「まあ風邪じゃどうしようもないな・・・」

炎山「あいつの事だから大事には至らんだろう」

やいと「仕方ないけど4人でやりましょうか」

こうしてパーティが始まった。

王様ゲームではやいとのかじ運が開花した。

対して炎山は王様のターゲットになり続け、ネコミミやメイド服やハバネロを付けられたり着せられたり食わされたり・・・

炎山「・・・何故俺ばかり・・・」

デカオ「まあそう落ち込むなって・・・△□△」

Orzになった炎山を励ますデカオであった。

ここでメールがある提案を出した。

メール「熱斗にメールしてみない？」

3人はメールが熱斗を心配しているのを察し誰も反対しなかった。

メールを送って5分ほど経つと返事が来た。

メール「え」と・・・

「こっちは大丈夫、パーティ楽しんで。あとロックマンも楽しんでこい！」  
だつて

デカオ「なら安心だな」

やいと「元氣できるように炎山のメイド姿の写真を添付しましょ」

炎山「おいやいと・・・その写真いつ撮った？」

やいと「え？さっき」

炎山「さっき・・・じゃないだろ！？送るなそんなもん！／／／／／／／／／／」

やいと「ごめん、もう送っちゃった」

炎山「・・・・・・・・orz」

こうしてデカオは再び炎山を励ます羽目になった。

そしてメールは思った。

炎山は将来絶対やいとの尻に敷かれると・・・

Ep.16 Winter Sick3

メイド姿の炎山の写真を添付したメールを送ると、返事はすぐにきた。

やいと「なにになに・・・」

「・・・炎山ってそんな趣味あったの？WWWWW」  
「だそうよ」

炎山「・・・説明無しで送ったのかよ・・・」

デカオ「まあまあ（；^|^A」

メール「そろそろプレゼント交換しない？」

やいと「そうね、時間も時間だし」

パーティの最後に行ったプレゼント交換はメールにとって偶然とは思えない結果だった。

デカオ「この高級そうなクッキーは・・・熱斗のか！」

やいと「この赤いスカーフは？」

炎山「それは俺のだ。でこの将棋の駒一式。・・・誰のだ？」

デカオ「ああ、それ俺のだ。」

炎山「かなり質が良いようにみえる・・・」

デカオ「当たり前前よお！俺の親父がーから手作りで作ったやつだからな！」

炎山「ほう・・・どうやら良いものを頂いたようだ」

メール「うわ〜可愛いこのぬいぐるみ）m・・（m（m

やいと「それは私からのやつよ・・・で熱斗君はメールちゃんのプレゼントね」

こうしてパーティーはお開きとなりやいと家の執事さん達が片付けを始めた。

メール「やいとちゃん！ちよっ・・・」

やいと「はい！これ！」

やいとに手渡されたのは1つの箱だった。きっとやいとがメールの事を気遣って用意しておいてくれたのだろう、中にはケーキが入っている。

やいと「行くんでしょう？何も言わなくていいわ」

メール「・・・ありがとう！／／／」

親友の気遣いに感謝してメールはやいとの家を出た。

その夜やいと家では・・・

やいと「・・・今日は来てくれてありがとう」

炎山「ああ。・・・にしても桜井は飽きないな」

やいと「当たり前よ〜あの2人昔から一緒なもの」

炎山「……フフッ」

やいと「……あんた今のちよつと気色悪い……」

炎山「……え、何故だ？」

やいと「だってあんた滅多に笑わないじゃない。」

炎山「……まあな……でも今日は楽しかった……ありがとう」

窓の先を見る炎山の口元はかすかな微笑を浮かべていた。

想定外の炎山の微笑にやいとは自然と顔が紅潮してしまった。

それに対して冷静を装って月を眺めていた炎山であったがやいとの様子をみて少し頬を赤くした。

やいと「……今日泊まってく？／＼」

炎山「……ああ／＼」

2人が見る月は綺麗な満月だった。

## Ep. 17 Winter Sick 4

メイルは熱斗の家に行くに何故か自宅に戻った。

メイル「まさかこれを渡す日が今日になるなんて……」

メイルは熱斗にあげるプレゼントを取り替えて、熱斗の家に向かった。

ピンポン

熱斗の家のインターホンを押した。家の電気はついていなく、しんみりとしていた。

しばらくしてドアが開いた

熱斗「どちら様……？……ゲホッ／／／／」

メイル「熱斗大丈夫？」

熱斗「……！メイルちゃ……ゲホッ！……風邪うつっちゃっよ……  
・ゲフッ！／／／／／／」

そういつと熱斗は一度ドアを閉めた。

メール「開けて熱斗くケーキ持ってきたよ」

そう言うと少ししてドアが開いた。それと同時に何か倒れる音がした。

バタッ

メール「?・・・!ねっと!?大丈夫!？」

メールは玄関で倒れている熱斗を引き摺りながらおぶって部屋に連れていきベッドに寝かしつけた。

熱斗「ごめん・・・運んでもらって・・・ゲホッ・・・// // //」

メール「何気を遣ってんのよ、困った時はお互い様」

当初は熱も少しだけで症状も軽かったらしいのだが、しばらく経つうちに熱も症状も悪化して立つのも精一杯の状況になってしまったらしい。

メール「ご飯食べた？」

熱斗「・・・今は食べたくない・・・ゲフツ・・・／／／／」

メール「食べないと治らないよ・・・・・・熱は何度ぐらい？」

熱斗「・・・今測ってる／／／」

そういつて熱斗は体温計を身体から取り出しメールに渡した。

メール「！？39.9度もあるじゃない！一体何したの！？」

熱斗「・・・覚えてない／／ゲホツ／／／」

熱斗の曖昧な反応に少々不満に思ったメールであったがこれ以上病人に問いただすのは無粋と感じキッチンに向かった。

冷蔵庫の中には新鮮な野菜、肉、調味料などがしっかり揃っている。さすが熱斗のママさんだと感心するメールであった。

そしてメールは手を動かし始めた。

メールがキッチンで手を動かしている頃、熱斗はベッドの上に横になってぼくっとしていた。

熱斗（・・・メール、なにしてるんだろう・・・汗の匂い大丈夫かな？／／／／）

そんな事を考えながら待っていると再びメールが戻ってきた。

メール「おかゆ作ったんだけど食べる？」

熱斗「・・・少しだけ・・・／／／／」

熱斗はゆっくりと起き上がりメールが作ったおかゆを口にした。

正直食べる気はあまりなかった熱斗だったが口に入れると案外食は進んだ。

ママとはまた一つ違った味であったがこれはこれでとても美味しいと熱斗は思った。

結局熱斗は残さず食べた。熱斗「御馳走様でした・・・美味しかったです・・・／／／／」

メール「はいお些末様でした 熱下がった？」



メイルがキッチンで後片付けをしているとテレビのディスプレイに  
ロックマンが表れた。

ロックマン「メイルちゃん、今日は本当にありがとう」

メイル「どういたしまして・・・ロックマンは熱斗に何かあった  
か分かる？」

ロックマン「実は・・・」

ロックマンが言うにはパーティ当日に近所の川で溺れている子供を  
見つけた熱斗が川に飛び込んで助けたいらしい。

おかげで子供は助かったのだが川に飛び込んだ結果、風邪をひいて  
しまったとロックマンは教えてくれた。

メイル「そうだったの・・・・・・熱斗の事今日は任して」  
ロックマン「えっでもっ!？」

メール「大丈夫 それにロールが家で待ってるわ。・・・ロックマンは女の子をひとりぼっちにさせる?」

ロックマン「・・・・・・・・分かったノノノ」

メール「じゃよろしくね」

そうしてロックマンはロールの元に向かい、メールは後片付けを再開した。

Ep. 19 Winter Sick 6

後片付けを終えたメイルは熱冷ましのシートと薬を持って熱斗の元に向かった。

だいぶ症状が良くなったのか・ぐっすりと寝ている。

メイル「・・・気持ちよさそうな寝顔ね・・・」

メイルは今までに色々な熱斗の表情を見てきた。

泣いた時・怒った時・嬉しい時・困った時・色々な表情を熱斗は見せてきた。

メイル「・・・ホントに熱斗は無理するね・・・」

熱斗を今まで見てきたメイルだから言える事だった。

熱斗が寝ているのを見計らってメイルはこっそりアルバムを見ることにした。

アルバムには熱斗の小さい頃の写真やデカオ達と撮った写真があっ

た。その中にはやいとやメール、炎山も写っていた。

メール「みんな変わらないなあ〜懐かしい」

アルバムを眺めていると最後のページに熱斗とメールのツーショットの写真があった。見る限り幼稚園の時だろう。

メール「こんな時もあったのね〜／／／／」

アルバムで思い出に浸っていると熱斗が目を覚ました。メールはその事に気付いてない。

熱斗「……ん？何してるの？／／／」

メール「えっ！？いや！？何も!?!」

びっくりしたメールは頭を後ろのアルバムなどが入った縦型のカラーボックスに頭をぶつけてしまった。

その衝撃でカラーボックスの上の荷物が落ちてきた。

熱斗「！危ない!!!／／／」

ガッシャーン！ガタガタツ！

熱斗はとっさに手を張ってメイルを覆い、荷物からメイルを守った。

熱斗「・・・・・・・・・・・・・・・・良かった・・・／／／／」

メイル「・・・・・・・・・・・・・・・・ありがと／／／／」

安心したのもつかの間、2人ともこの体勢はまずいと思った。

熱斗がメイルを守ったのは事実だが、実際は熱斗がメイルを押し倒しているようにしか見えない・・・・・・・・

そして熱斗は距離をゆっくりと縮めてきた。

メイル「え！？／／／あつ！？／／／ねつと！？／／／／  
／ちよつと！？ダメ・・・／／／・・・え？」

熱斗はそのままバツタリメイルに倒れた。



Ep. 20 Winter Sick 7

翌日先に目を覚ましたのは熱斗だった。

メールの看病もあって熱も下がりだいぶ楽になった。

メールは熱斗のベッドに寄りかかってぐっすり寝ている。熱斗を  
晩看病してお疲れのようだ。

熱斗「よく眠ってる・・・大変だったんだろうな」

熱斗が見たメールの顔は何かを成し遂げた安心そうな寝顔だった。

熱斗はベッドから起き上がるとメールに毛布をかけてあげた。

ふと熱斗が机に目をやるとプレゼントの箱がちょこんと置いてあっ  
た。

中を開けてみると綺麗な手編みのマフラーが入っていた。誰が編ん  
でくれたかは聞くまでもなかった。

熱斗はパジャマを着替えるとメールをベッドに乗せてあげた。

熱斗「・・・ありがとう／＼／＼」

寝ているのを確認した熱斗はメールの左頬にキスをして部屋を出た。





その姿が熱斗には刺激が強すぎたらしく、夏の時のように鼻血を吹き出し倒れてしまった。

メール「熱斗！？／／／／／大丈夫！？．．．．．つ  
もく熱斗のえつち／／／／／．．．．．／／／／／」

恥ずかしい半面、鼻血を流し倒れる熱斗に少々満足げなメールであった。

Ep.20 Winter Sick7 (後書き)

ここまで小説を見てくださった方、誠にありがとうございます！  
MATSUETSUのMATSUです。

今後もしっかり続きを投稿していきたいと思いますが、私も勉強も部活もありますのでしっかり両立してやっていきたいと思っています。

最後に・・・

感想やアドバイスどんどんお待ちしております！

一言でもやる気になりますのでどうか今後の参考の為によりしくお願ひします。

EP. 21 Girls Valentine (前巻)

Girls Valentine

## Ep. 21 Girls Valentine

冬溶けの2月

熱斗達の3学期も始まり忙しくなる時期である。

そんな中、休日にメイルとやいとはある所に来ていた・・・

舟子「あ、2人ともいらっしやい！あがってあがって」

メイル& amp・やいと「お邪魔します」

メイルとやいとが今回向かったのはアクアマンのオペレーターである城戸舟子の自宅であった。

舟子は現在秋原小学校の家庭科教師をしている。第二人を今日まで養ってきたこともあって、家事関係が得意で料理も上手い。

「どうやら今回は女性陣でチョコ作りをするようだ・・・」

メイル「綺麗な家だね」

やいと「さすが家庭科の先生のことだけはあるわね」

現在舟子が住んでいる家は小さい頃から貯めた収入で買ったらしい。

モダンな造りをしている家で清潔感溢れる色合いになっている。

そんな話をしながらリビングに向かうと・・・

メール&amp;やいと「まりこ先生!？」

まりこ「あら!？メールちゃんにやいとちゃんじゃない!お久しぶりね〜」

リビングにはお茶を頂きまったりしているまりこがいた。

どうやらまりこも舟子のお誘いでここに来たらしい。

舟子「全員揃ったので始めましょう!」

そして4人のチョコ作りが始まった。

今回は2組に分かれてチョコ作りをする事になった。

キッチンは1階と2階に1つずつあり、複数組での料理ができるよ

うになっている。

その頃デンサンモールに来ていた熱斗と炎山は・・・

熱斗「炎山はホワイトデーなにをあげる？」

炎山「相手が気に入るような物だな。まだ1ヶ月もあるが・・・」

「

どつやらホワイトデーの贈り物の下見に来ているようだ。

Ep. 22 Girls Valentine 2

熱斗達がデンサンモールにいる頃、舟子の家の1階キッチンを使っているやいとと舟子は・・・

やいと「ところで舟子さんは誰にチョコをあげるんですか？」

舟子「えっ!?!?//まあ身近にいる男性よ//」

やいと「え〜分からないわ〜誰なんですか？」

舟子「・・・大山君//」

やいと「大山?・・・つてデカオ!？」

舟子「・・・ええ//」

やいと「・・・」

あまりに驚いたのかやいとを顔を硬直させている。

舟子「そんな驚かなくてもいいじゃない(;^\_^A」

やいと「でもデカオのどこが好きなんですか？」

舟子「明るくて、力強くて、優しい所・・・／＼／＼／」

やいと「ふん、あのデカオがね〜(〜)」

詳しく聞くと以前に舟子がヤンキーに絡まれた時、助けてくれたのがデカオだったらしく、その時以来舟子は、デカオに恋心を抱くようになった。

舟子「やいとちゃんは・・・炎山君に？」

やいと「そうですね／＼・・・でも、あいつがチョコで感情を表に出すとは思えませんかね・・・」

舟子「でも内心喜ぶと思うよ〜冷静な人ほど嬉しい感情を抱く人が

多いらしいし・・・」

やいと「そうなんですかね？」

舟子「そんなもんよ」

こうして自分達のコイバナに花を咲かしていくうちにチヨコの完成が近づいてきた。

しかしここで舟子が驚きの言葉を口にした。

舟子「ねえやいとちゃん、仕上げに入れてみる？・・・・・・媚薬」

やいと「はい・・・・・・ってびっ、媚薬!？」

舟子「ええ チヨコの最大の隠し味よ」

そういつてポケットから媚薬を取り出した。

やいとは最初こそ驚いていたがいつも冷静を装っている炎山を考えるうちに、少しイタズラしてあげようという思いになり、

やいと「・・・少しだけ」

使ってしまった(\*^ ^\*)

一方でデンサンモールにてホワイトデーの贈り物を探す炎山達・・・

炎山「何か悪寒が・・・」

熱斗「?どつたの?」

炎山「いや、なんでもない・・・さあ行くぞ」

そういつて炎山が向かったのは、雑貨屋。女性が気にいりそうな物を多く取り揃えている。

炎山「これなんかどうだ?」

炎山が持つてきたのは大きなヒヨコのぬいぐるみだった。

熱斗「・・・お前さ、やいとのパレゼントなんでもヒヨコにしてない？そんなにヒヨコ好きなのか？卵の殻被ったような頭して」

炎山「誰が卵の殻被ったような頭だ！これは普通だぞ。それにヒヨコ・・・可愛いだろ／＼／＼／＼」

熱斗「わあゝ炎山くんかわいいゝ　ネコミミに続いて新しい発見が・・・」

ポカッ！！

この時炎山のリアットがクリーンヒットした事は言つまでもない

Ep. 23 Girls Valentine 3

場面は変わり舟子の2階のキッチン・・・

まりことメールが互いの近況を話し合いながらチョコを作っていた。

まりこ「 で闇太郎さんホント料理上手いのよ」

メール「へへあの日暮さんが・・・そうは見えませんが・・・」

まりこ「まあ努力の賜物よね。ところで熱斗君は元気？」

メール「はい、元気ですよ、まあ寝坊が絶えませんが・・・」

まりこ「まあ 変わらないのね、でも熱斗君のおかげで今の私達があるって言うても過言じゃないのよね。」

メール「ホントですよね、実感湧きません」

まりこ「クスッ 確かに」

やはり教え子と先生の間柄なのか、話がよく合う。

教え子に対して素直に真面目に接してくれるまりこに対して、さすがと思うメールであった。

メール「でも日暮さんと先生が結婚した時はビックリしましたよ！」

まりこ「別に驚く事じゃないわ、まあ日暮さんのプロポーズに私が応えただけよ。そういえば私の結婚式のブーケトスを取ったのメールちゃんだったわよね」

メール「はい、あの時はたまたま私の所に来たんですよ。口へ」

まりこ「いいえ、偶然ではないと思うわ。……メールちゃん好きな人いるでしょ？」

メール「え！？い、いるわけないじゃないですか！／＼／」

まりこ「バレバレよ。まあそこもメールちゃんの可愛い所なんだけど」

メール「私可愛くなんてないです！」

まりこ「も。素直じゃないわね、まあいいわ」

チョコの完成が間近になった時、使い終わった食器を洗いながらまりこはこう言った。

まりこ「でもこれだけは覚えておいて。世の中には必然ということがあるの。」

周りの出来事がたまたまだったということもあれば、運命だったという事もあるわ。

それを判断するのは自分、あなたよ。」

メール「自分……ですか」

まりこ「そう。つまり運命を良い方向に持っていけるかは自分次第のこと。……という事でチョコに最後の仕上げをしましょ。」

そういつてまりこはチョコにある薬を入れた。

まりこ「これで固めて完成よ。」

メール「今入れたのは何なんですか？」

まりこ「秘密 熱斗君に食べさせた時に分かるわ。」

メール「なんで熱斗が出てくるんですか？／／／」

まりこ「別に例えで出したただけだけど？」

メール「っもう！／／／／／／／／」

場面はまた戻り熱斗達は・・・

熱斗「ハックシユン！！！！」

炎山「風邪か？」

熱斗「ん？いや、違うよ。噂でもされてんのかな？」

Ep. 24 Girls Valentine 4

バレンタインデー当日・・・

やいと「はい、コレ」

そういうとやいとは炎山にチョコを渡した。どうやらやいとの家には炎山が来ているようだ。

炎山「これは？」

既に分かっている炎山であったが、あえてとぼけた態度をとっていた。

やいと「今日はバレンタインデーよ！チョコに決まっているじゃない！／＼／＼」

炎山「ああ、ありがとう」

やいと「私はお茶の準備してくるからその間よかったら食べてて」

炎山「ふむ、頂上」

そう言つとやいとはお茶の準備の為に部屋を出た。

まあ本当は媚薬入りチョコを食べた反応を見たいのだろう・・・

しばらくするとチョコを食べた炎山が身体に異変を感じるようになった。

炎山「・・・身体が・・・／／／／／」

身体が熱くなり、疼く感覚に炎山の思考は少し低下していた。

しばらくしてやいとが戻ってきた。

炎山はやいとを見た途端、身体にピリツと電流が走るような感覚を受けた。

やいと「お待たせ、？炎山どうし  
」

炎山「来るな！！／／／／」

近づいてくるやいとに炎山は必死の抵抗をした。

炎山「今は．．．来ては行けない／／／／／／／／／／／／」

やいと「え？なんで？」

やいとは内心媚薬が効き始めたと思いつつも、普通どおり接した。

炎山「．．．いや、なんでもない。取り乱してすまなかった．．．  
／／／／／／／／／／／／」

炎山は媚薬の効果に負けることなく平然を装った。

やいと「（案外なかなかやるじゃない／／／）別に構わないけど．．  
．熱あるんじゃない？」

そう言うことやいとは炎山に近づいていき肌と肌と密着させた。

炎山は自分の理性を信じ、身体を場の流れに任じた。

やいと「（頑張るわね／／／／／／／）熱あるじゃない！」

炎山「大丈夫だこのくらい！／＼／＼／＼」

そういつて炎山はやいとを優しく突き放した。

どうやらここは炎山の理性が勝っていたようだ。

．．．しかし、この幼くも立派な理性は1つのきっかけで崩れ落ちるのだった。

結果的に最後まで炎山は何とかやいとを襲わずにすんだ。

そしてやいと家の家を出る時、

やいと「ねえ炎山．．．」

炎山「どうした？．．／＼／＼」

やいと「今日も来てくれてありがとう／＼」

そう言い炎山にお礼のキスをした。

それで炎山の理性は一気に崩れ去った。

バサッ！！！！



Ep. 25 Girls Valentines

一方メールの家では熱斗が高校で出された課題をやる為に來ていた。

熱斗「……ああ〜！こんな問題分かんねえつつの！！」

メール「それは熱斗が授業中寝てるからでしょ！」

問題が解けない熱斗にメールがツツコミをいれる。

この2人は昔から変わらない……

メール「ちよつと休憩しましょう。はいコレ、バレンタインのチョコ」

熱斗「お、サンキュ」

メール「食べたら勉強再開だからね！」

熱斗「は〜い……」

こうして2人はしばしの休憩を取り、勉強を再開させた。

メール「思ったけど、まりこ先生がチョコに入れた薬．．．なんなんだろう．．．食べさせれば分かるって言ってたけど．．．」

そんな事を思いながら勉強に手を出していた。

しかししばらくすると今までとは何か、熱斗の様子が違う事に気付いた。

メール「熱斗ずいぶん静かね．．．チョコ食べる前なんてあんなに勉強に妥協してたのに．．．」

メールの思う通り、熱斗が随分静かになった。真剣にペンを走らせている。

メール「随分集中してるわね．．．ん？熱斗、なんか身体が赤い．．．なんか恥ずかしいのかな？」

身体が少し火照っているのか、少し暑い表情を見せている。

熱斗「・・・・・・・・・・」

メール「（具合でも悪いのかな？声かけようかな・・・）・・・ねえ  
熱斗」

熱斗「どうしたの？／＼」

返事はする。・・・しかし、視線はこっちには来ない。

メール「もしかして、具合悪い？」

熱斗「大丈夫だよ／＼」

熱斗らしくない返事だった。視線も変わらない。

メール「（絶対おかしい！いつもの熱斗じゃないもん！）」

熱斗の異変を確信したメールは、いきなり熱斗の手を掴んだ。

熱斗「！！！！！」

サッ

熱斗は素早くメールの手を突き放した。

メール「熱斗！！！！」

熱斗「……………」

メール「どうしたの！？さっきから様子変だよ！？」

熱斗「別に……／＼」

メール「別に……じゃないでしょ！！さっきから目は合わせないし、口数は少ないし、熱斗じゃな」

バツ！

突如熱斗はメールの両肩を掴んだ。その手は微かに震えている。

メール「…………熱斗？」

熱斗「メール……」

2人が見つめあうとしばらくの沈黙が続いた。

その後先に口を割ったのは……

熱斗「もしかしたらだけど……チョコに何か変なの入れた？」

熱斗だった。

メール「まりこ先生と作ったとき、何かを……」

それを聞いた熱斗は1つため息をついて、帰宅の準備を始めた。

メール「熱斗？」

熱斗「ごめん、今日帰るわ。なんか身体が変になって……」

そう言つと熱斗は帰っていった。  
メール「熱斗・・・」

Ep. 25 Girls Valentine 5 (後書き)

熱斗「まりこ先生、媚薬入れたな／＼／＼」

そう思いながら自宅に帰る熱斗であった。

メール「……………！先生まさ

か媚薬を！」

熱斗が帰ったあと、やっと先生が入れた物が分かったたたメールであった……………

EP. 26 Cherry Blossoms (前巻)

cherry blossoms

Ep. 26 Cherry Blossoms

4月

就職・進学・入学などの始まりの季節である。

熱斗達も高校2年生になり、新学期が始まった。

勉強に身が入らない熱斗と集中して取り組むメールの姿は、相変わらず変わらない。

熱斗「微分積分……サヨナラ」

パン！！

綺麗なハリセンの音が空に響いた。

メール「サヨナラって何よ！っていつか微分積分の授業、熱斗寝てたでしょ！」

熱斗「だってネットセイバーの仕事で睡眠時間が……」

メール「でも授業はしっかり受けないと……」

高校2年生になった2人は、今後の進路をしっかりと建てなければならぬ時期にある。

熱斗「メイルは進学？」

メイル「うん、栄養士になる為の勉強が出来る所かな」

熱斗「そうか、進路はもう決まってるのか」

メイル「熱斗は？」

熱斗「俺は科学者になる為に進学するよ」

メイル「クスッ、昔から変わらないのね」

熱斗「え？何が？」

メイル「ううん、なんでもない 科学者になるために、勉強頑張らないとね」

熱斗「はあ、い．．．」

そんな会話をしながら下校しているとある話題が挙がってきた。

メイル「そういえば明後日みんなでお花見しようってやいとちゃんからメールあったよ」

熱斗「へ、知らなかった。」

メイル「なんか色々な人が来るらしいよ」

熱斗「色々な人って・・・誰？」

メール「私に聞かれても分からないわよ」

熱斗「そうか・・・でも誰が来るんだろう」

そしてお花見当日・・・

やいとが呼んだ色々な人達は、かつて熱斗が共に戦った戦友達だった。

チャーリー「やあ熱斗！元気だったか？」

熱斗「もち！ステラさんは元気？」

チャーリー「もちろん！今日は疲れたから来なかったけど。にしても燃次に会うのも久しぶりだな」

燃次「まったくくだな！・・・それにしても女子達は何やってんだ？遅いな」

熱斗「もう少しで来るって言ってた時間になるけど・・・」

そう男性陣が話していると女子達が揃って集まってきた。

やいと「お待たせ〜！」

来たのは、やいと・メール・ジャスミン・ステラだった。

チャーリー「ステラ！家にいるんじゃないの？」

ステラ「彼女らに誘われちゃって来ちゃったわ 息子は執事に預けてきたから大丈夫。」

チャーリー「そうか、それは良かった」

こうして、夜桜の宴が始まった。

Ep.26 Cherry Blossoms (後書き)

どうも、MATSU TETSUのTETSUです(\*^ ^\*)

更新遅れて申し訳ありませんでした( ; ; )

最近は期末テストの勉強や部活で忙しく大変な状況にありますので  
どうかご了承下さい(ノー\ ;)

MATSUも期末テストでなんやら大変らしいです。

これからもしっかり書いていくのでよろしく願いします。

ここで今回出てきた登場人物のおさらいをしています。

チャーリー：ジャイロマンのオペレーター。ナイスガイで小説内ではステラの夫。

燃次：ナパームマンのオペレーター。熱血漢かな？

ステラ：現マグネットマンのオペレーター。小説内ではチャーリーの妻。

ジャスミン：メディのオペレーター。メールの恋敵な存在。

Ep. 27 Cherry Blossoms 2

乾杯！(^^) / \ (^^)

燃次の合図でお花見は始まった。

飲み物や食べ物は全て燃次とチャーリーが用意をしてくれていた。

燃次「にしても、ネビュラに立ち向かった時のあの頃が懐かしいな  
」

チャーリー「まったくだよ、皆で本拠地まで行っちゃうんだもん」

そんな世間話をしていると炎山が来た。

炎山「遅れた、すまない。」

燃次「別に構わねえって。こっち来いよ」

炎山「ああ、邪魔する。」

こうして序盤は皆楽しい一時を過ごしていた。  
しかし……

やいと「早く次のおつまみ持ってきなさいよ！／＼／＼／＼／」

メール「熱斗のバカアゝ あはは 〃〃〃〃」

ジャスミン「あはは なんだかスゴく気分が良いアルゝ 〃〃〃〃  
（〃〃〃〃）」

炎山・チャーリー・燃次を除く全員の様子がおかしくなった。

炎山「燃次．．盛ったな」

燃次「ばれたかハロハ；まあそりゃばれるよなゝ」

チャーリー「好きだねゝ酒盛るの」

どうやら燃次が彼らの飲み物にお酒を盛っていたらしく、ジャンジヤカ騒ぎあつてる。

メール「ねつとあゝ 〃〃ちおいでゝ 〃〃〃〃」

ジャスミン「ねっとは私のアル」 / / / / / /

.....

メイル「ジャスミン、悪いけど、どいてもらえる？」

ジャスミン「やだネ。ねっとは私のものアル」

メイル「そんなの誰も決めてないわ、それに独り占めはいけないわよ」

ジャスミン「何いつてるネ、私が決めたアルよ」

.....ゴゴゴゴゴゴッ

燃次「怖え.....」

炎山「醜い争いだな.....」

チャーリー「ちょっと止めないと危ないね.....」

燃次「そうだな.....」

そうとうと燃次が争ってる2人の間に入った。

燃次「よし、王様ゲームで決着つけようぜ！」

王様ゲームとは、

くじ引きで王様になった人が番号を指名して、その人に色々なお題をやらせるゲームである。

燃次・メイル・ジャスミン・熱斗・やいとの5人で王様ゲームが始まった。

どうやらステラは酔いつぶれて寝てしまったらしい。

チャーリー「ステラは僕が見てるから皆でやってて」

炎山「俺は、やらない」

そういつて2人は王様ゲームに参加しなかった。

2人とも必ず良くない事が起きることを感付いていた事は言うまでもない……

Ep. 28 Cherry Blossoms

まず王様をを引き当てたのはメイルだった。

メイル「3番が4番ジャスミン（熱斗）にい〜・・」

ジャスミン「わたしとねつとアルね〜 / / / /」

熱斗「そうだねえ〜 / /」

メイル「ビンタ」

バッチイイン！！

鞭を打つようなビンタが熱斗にヒットした。

燃次「ギャハハハハッ！やべえ、腹筋があ崩壊する〜！」

2回目はジャスミンが王様に

ジャスミン「4番メイルが1番（熱斗）にい〜・・」

メイル「わたしとねっとだよ〜 / / / / /」

熱斗「ああそうだ」

ジャスミン「ビンタアルね」

バッチイイン!!

燃次「キャハハハハ!!!! やべえアハハ!! 笑い止まんねえ!!」

その後

メイル「1番が4番ジャスミン(熱斗)にビンタ」

バッチイイン!!

ジャスミン「2番が3番メイル(熱斗)にビンタね」

バッチイイン!!

メイル「4番が2番ジャスミン(熱斗)にビンタ」

バッチイイン！！

ジャスミン「1番が2番メイ(熱斗)にビンタ！」

バッチイイン！！

段々とビンタがエスカレートするに連れて燃次達は熱斗の事が気の毒になってきた。

チャーリー「燃次、熱斗が可哀想になってきたよ……」

燃次「ああ、まあまだあんな余裕そうな面してっけどな……」

熱斗「あはは ( \* ^ ^ \* )」

鞭のようなビンタを何度もくらったにもかかわらず笑顔を振りまく熱斗がいた。

やはりお酒というものは恐ろしい……

そうしているうちにだんだんとお開きの時間になってきた。女子陣は全員お酒で眠ってしまった。

チャーリーはステラ、炎山はやいと、燃次はジャスミン、熱斗はメイルを背負って帰る事になった。

その帰り……

熱斗「にしてもなんでこんなに頬がはれてんだろっ？燃次さん、何かありましたか？」

燃次「さあ……知らんな………。^o^」

何も覚えてない熱斗にしらをきる燃次であった。

燃次「でもお前、いつ告るんだ？」

熱斗「……分からない……今はなんとも」

燃次「今はいいけど、絶対後悔するような事はするなよ」

熱斗「ああ、燃次さんもね」

そういつと熱斗は目線を燃次が背負っているジャスミンに写した。

燃次「分かってたか……」

熱斗「なんとなく・・・ね・・・」

互いに惚れた女を背負いながら夜道を歩く2人であった。

EP. 29 Mayzon (前編)

Mayzon

桜吹雪も穏やかになり、だんだんと緑が目につくようになる時期。近所には風の流れに沿って鮮やかに泳ぐ鯉のぼりが見える。

しかし、この時期には危険な病気にかかる事がある。

その病名は五月病。

入学や就職など、忙しい時期を過ごした後になりやすく、軽いうつ病の症状がある。

新たに高校2年生になった彼らもその例外ではなかった……

熱斗の部屋にて

ロックマン「熱斗君も高校2年生になってからは随分勉強するようになったね」

熱斗「将来の夢を現実にする為にも、まず勉強はやらないといけな  
いしな」

ロックマン「そうだね！でも無理はいけないよ」

熱斗「ああ！」

勉強する熱斗に対し身体を気遣いながらも応援する……流石はロックマンだ。

今までの熱斗とロックマンの息のとれたネットバトルの強さがよくわかる所でもあるだろう。

1週間後の中間考査の結果にて……

メール「熱斗凄じやない！学年10位だよ！」

熱斗「今回は頑張つて勉強したしな」

メール「熱斗が勉強頑張るなんて……明日は流星群でも降るのかしら……」

熱斗「ひでえ扱いだな……」

必死に勉強した熱斗は格段に順位が上がっていた。

今回の考査の為に熱斗は誰にも負けぬ努力をしてきたのである。

その日の夜、テストの結果が出て安心する者も落胆する者もリリースできる時間。

それがテスト終了後である。

ゲームをしたりテレビを見たり、人によって様々な事をする期間だ。

はるか「学年10位！？凄くない！今夜はご馳走作らなきゃ！」

熱斗「今日はご飯いらない。寝るね、おやすみなさい」

そういつと熱斗は自分の部屋に向かった。

はるか「熱斗ったら・・・どっしたのかしらっ？」

いつもだったら大喜びするはずなのに、顔色一つ変えずに部屋に戻る息子。

我が子を心配せずにはいらなかったはるかであった。

翌日の土曜日

通常だったら休日遊ぶ事で一生懸命になる熱斗なのだが、今回は何かが違った。

朝から朝食も摂らずにずっとベッドの中に籠もっている。

ロックマン「熱斗君大丈夫？具合悪いの？」

熱斗「……ああ」

ロックマンの問いかけにもただ一言返すだけで他に言葉を発しようとはしなかった。

お昼近くになり、やっと熱斗がベッドから出た。

はるか「あ、熱斗おはよう。今日は随分ぐっすり寝てたわね」

熱斗「うん、おはよう」

その後昼食を摂った熱斗は再び部屋に戻った。  
しかし相変わらず熱斗のいつもの元気が見られない。

はるか「(熱斗ったら、本当にどうしちゃったのかしら?)」

そんなはるかの心配をよそに部屋の天井を見て、熱斗はベッドで寝ていた。

今まで過ごしてきた部屋の天井。その風合いは小さい頃から変わらず、熱斗が成長する度に少しだか天井と頭の距離は縮んでいた。

怒られた時、悲しい時、嬉しい時、熱斗の様々な顔をこの天井は見  
てきたであろう...

熱斗「...なあロックマン、この部屋昔から変わらないな」

ふと発した言葉。

先ほどまでは言葉を発する気力すら無かったのに。

ロックマン「ベッドや机の位置もだね」

熱斗「なんだかんだで、この部屋に17年もお世話になってるんだな。」

ロックマン「……朝から元気なかつたけど、何かあったの？」

熱斗「……いや、別に何かあったといえはないんだけどさ……」

身体を仰向けにしてゆっくりと話した。

熱斗「……最近さ、自分のやってる事に意味があるのかわかって思っんだ。

そりゃテストで上位になるのは嬉しいさ、でもその事に意味があるのかわかって思っつとどうなのかわかって……」

静けさが漂う中、ロックマンは黙って熱斗の話を聞いていた。

熱斗「そんな事を考えてると、気力が無くなる。よくわかんねえなホント……」

ロックマン「熱斗君……」

熱斗「ちょっと散歩してくる。」

そう言いつつ、彼はPETを置いて、部屋を出た。

彼が散歩に向かったのは秋原町にある川辺の道。

ここは熱斗の家から少し離れた場所にあり、公園やベンチも設置してある。

川辺の道からはジョーモン電街や科学省の建物を見る事ができる。

川辺の道を一人とぼとぼ歩いていると前方にベンチを発見。少し休む事にした。

綺麗な青空を小さい雲がゆっくりと流れて、近くの公園では子供達が無邪気に遊んでいる。

そんな周囲を観察していると、

????「少し隣座つてもいいか？」

熱斗「え、はい、どうぞ……ん？」

ジャージ姿にサングラス。どこかで見たことのある髭、赤い色の髪。

熱斗「……もしかしてヒノケン？」

ヒノケン「どうして俺の名を?……ん？」

何度か聞き覚えのある声、トレードマークのヘアバンドや服装は無いが整えられた焦げ茶色の髪型、そして透き通った綺麗な目。

ヒノケン「もしかして光熱斗？」

熱斗「そうだよ」

ヒノケンはあまりの服装の変化に驚きを隠せなかった。

ヒノケン「いや〜気付かなかった！服装も髪型も変わってんだもん」

熱斗「高校生になるとヘアバンドもあの服装も小さくなっちゃって、それに前に会ったのは小学校の卒業式の時だもん」

ヒノケン、本名は火野ケンイチ。

かつてはWWWの一員だったが現在は改心し、小学校の教師を勤めている。

熱斗はセントラルタウンの才葉学園に登校していた時、特別教師としてお世話になっていた。

ヒノケン「にしても、どうしたんだ？うかない顔して」

熱斗はヒノケンに対し、ロックマンに話した事を同じように話した。

今はこの想いを誰でもいいから聞いてほしかった。

ヒノケン「……………なるほどな、お前も難しい事を考えるようになったもんだ」

全てを話し、黙り込む熱斗に言葉をかけるヒノケン。  
その言葉は温かく、心を落ち着かせてくれた。

ヒノケン「熱斗、ちょっと一緒に来いよ。」

ヒノケンの一言に従い、熱斗は彼とある場所に向かった。

ヒノケンに連れて来られたのは川辺の道から少し離れた小山の頂上。頂上までの道はすっかり整備されていて、ウォーキングコースとしても活用されている。

ヒノケン「この景色見てみるよ、なかなかの絶景だぞ。」

ヒノケンの言う通り頂上の景色は、とても綺麗だった。川辺の道の場所よりもよりはつきりと科学省やジョーモン電街が見え、綺麗な夕焼け空も前方に見える。

熱斗がこの絶景を見入っていると、ヒノケンはゆっくりと口を開いた。

ヒノケン「確かに、自分のやっている事に意味があるのかっていえば俺も必ずしも首を縦に振る事は難しいな……」

でも、誰にでも大切な物はあるはずだ。その守りたい大切な物に対し自分のやっている事は、もしかしたらとても重要な事なのかもしれない……」

ヒノケンは夕焼け空を見ながら話し続ける。

ヒノケン「難しいな、言葉にするのは……ハハツ……」

……自分のやる事に意味があるのかが分からなければ、意味を見なければいいさ。お前の努力はいつか守りたい物を守る時、絶対に役に立つ。

この世界、誰もが問題を抱えている……だけど、素敵な明日を願っている俺は思う。大切な人と生きる明日をな。」

夕焼け空を眺めるヒノケンの目はとても輝いていた。

ヒノケン「ま、3度も犯罪に手を染めた俺が言える言葉じゃないけどな、アハハツ！」

熱斗「そんな事ないよ！」

自虐的な発言をするヒノケンが力が入った声で遮る熱斗。

熱斗「・・・俺自身まだ自分がこんな気持ちになったか分からない。  
・・・でもヒノケンにこの事を話して何だか気分が楽になったよ。  
それに大切な事も教えてもらった。」

ヒノケン「熱斗・・・。」

熱斗「自分がやっている事の意味は今はまだ分からない・・・  
でもいつかきつと分かる日が来ると思う。」

ヒノケン「・・・そうか」

朝の無気力な彼の姿は一皮剥けて何かを決心した姿となっていた。

ヒノケン「……………大人になったな……………ん？やべっ！嫁におつかい頼まれてたんだ！

タコまだ売ってっかな？

熱斗！俺は帰るぞ！またな！」

そういつてジャージ姿のヒノケンは走って山を下っていった。

その背中からは、愛する何かを守るうとする強い意志が感じられた。

FFPWSilentSpace (前置)

SilentSpace

高一の夏

昨年の今頃、ハワイに行つてバカンスを楽しんでいた熱斗達は図書館で勉強をしていた。

どうやら各自の進路に沿つた学習をしている。

この図書館は科学省の近くに建てられている生涯学習センターの一部で、運動場・パソコン室・図書館など様々な施設を取り揃えた公共の機関である。

熱斗「にしてもここは涼しいなあ、さすが公共施設。」

やいと「でも、なんだか涼しすぎない?」

メイル「だよな、結構肌寒い・・・」

デカオ「そうか?俺は丁度良いと思うが」

熱斗「……いや、少し寒いな、少し外出ないか？」

熱斗の提案に賛成し、一回外に出る事にした。

本来なら暑いと感じる熱気も、生暖かく何故か気持ち良く感じられる。

それだけあの中が寒かったのであろう……

やいと「そろそろお昼頃になるし、昼食食べに行かない？」

デカオ「腹がそろそろ減ってくる頃だしな！何処かいい所ないか？」

メール「あ、私美味しい所知ってるよ！新しく出来た所なんだけど」

熱斗「……俺はいいや」

熱斗の一言で他の3人は信じられない物を見たような目で彼を凝視し、質問責めにした。

やいと「どうしたのよ光君!？」  
デカオ「お前らしくないぞ!？」  
メイル「具合悪いの!?(・・・?)」

熱斗「えっ、あ、今朝御飯遅かったんだアハハツ^ロ^」

3人は目の色を変えない・・・

熱斗「本当だつて!あんまりお腹減ってないし、俺は図書館で勉強してるから3人で行って来なよ」

3人「・・・まあ、それなら・・・」

そう言うと3人は昼食を食べにメイルの行く店に向かった。

3人の背中を見送り、熱斗は図書館に戻った。

熱斗「腹減った・・・」

ロックマン「皆と行けば良かったのに」

図書館の大きな机でぐったりと頭を伏せている熱斗をロックマンがなだめる。

なんだ、お腹減ってるじゃないかと責めたくなるような状況だが、彼にも理由があった。

熱斗「だって、財布忘れたんだもん・・・」

もし、財布さえ忘れなければ皆と昼食食べに行けたのに。そう思うと後悔と悲壮感で心が満たされた。

ロックマン「誰かにその場だけ建て替えても」

熱斗「ロック、それは俺が一番嫌な事だって知ってるだろ。ああ！墓穴掘ったあ！」

どうやら金銭関係で相手に迷惑を掛ける事に対し、熱斗はあまり快くないようだ。

天井を見上げてみる。

ドームのような大きな天井で全体的に開放的な造りになっている。周りはガラス越しになっていて、室内に縛られるような感覚はない。

熱斗はこの開放的な空間が気に入っている。

どのような構造やデザインなのかは読者の想像にお任せしよう。

Ep. 34 Silent Space 2

メール達が帰ってくるまでの間、勉強する事にした熱斗は黙々とシヤーパーンを走らせていた。

自分が苦手な教科を積極的に勉強していく姿勢。

明らかに昔の熱斗からは見られない姿。

彼の成長を物語っていると云っても間違っていないだろう。

しばらくして気分転換に館内を見回る事にした。

一階には図書館が中央に大きく設けられており、二階にはパソコン室と会議室がある。

室内運動場は三階にあり、一階の図書館からは天井が一望できる。

熱斗「2時半か．．．皆遅いな．．．」

正午を過ぎた祝日という事もあって人数はほとんどいない。  
館内を回り歩いた後、再び図書館に戻ると館内は誰もいなかった。

熱斗「誰もいないな．．．．．ん？」

．．．．．

ふと静かだった館内からピアノの音楽が聞こえてきた。

熱斗「・・・Gymnoppdies・・・」

ジムノペディ  
Gymnoppdies、エリック・サティによって1888年に作曲された名曲だ。

近年では映画やゲームの挿入歌としても使用されている。

その緩やかな旋律は館内全体に響いて、安らぎの空間をもたらしている。

ふと思った。

館内に音楽室などあったのだろうか？

疑問に思った熱斗は流れている音楽を辿り、館内を捜し回った。

そして三階の一番奥の部屋。

螺旋通路の一番上にその場所があった。

ドアのガラスから音楽室を覗いてみると、長いピンク色の髪の毛の綺麗な女性がグランドピアノの前で座り、音楽を奏でていた。明らかに年上だ。

熱斗「にしてもあの顔立ち、メイルにそっくりだな・・・」

長いジーンズを履き、上はTシャツ。

男の子のような格好だが、これはこれで似合っていると熱斗は思った。

後に演奏が終わると、女性が手招きをしてきた。

手招きをされ少し戸惑う熱斗だったが、このまま逃げでは失礼だと思ひ、音楽室に入った。

Ep. 35 Silent Spaces

「あなたが光熱斗君ね」

音楽室に入ると女性が声を掛けてきた。

熱斗「はい．．．でもなんで俺の名前を？」

女性「そりゃ世界を何度も救ってる英雄だもの、知らないはずないわ。それにロックマンも」

ロックマン「あなたはここで何を？」

女性「私はたまにここに来てピアノを弾かせてもらってるの、いつもは海外で仕事してるから」

そういうと女性はパイプ椅子を出してきた。どうやら熱斗と会話したいらしい。

女性「今日はここに何しに来たの？」

熱斗「友達と勉強しに来ました。友達は今昼食を食べに行ってます。」

女性「熱斗君は行かなかったの？」

熱斗「ええ、今日は朝御飯が遅かったので・・・」

財布を忘れたなど恥ずかしい事を言えるわけがない・・・

その後女性との会話は弾んでいった。

熱斗の今までの戦いや冒険の話その女性は子供みたいに目を輝かせて聞いていた。

そんな女性の姿に熱斗も気が楽になった。

熱斗「ところであなたは外国に住んでいるんですか？」

女性「まあ、そんな感じだわ。元々は世界旅行に行ってたんだけど、ある行き先から頭が離れなくなって、そこで仕事をしようになっ

たの  
」

詳しく聞くと日本で子供が一人暮らしをしているらしく、夏休みの間を使って様子を見に来たらしい。  
本当だったら夫も来るはずだったのだから仕事が忙しく今回は彼女一人で帰ってきたそう。

女性「しばらく会ってないけど……(じー)」

熱斗を細い目で猫のように見つめている。

熱斗「？」

女性「元気そうね」

カーン・カーン・カーン・カーン……

音楽室の振り子時計が4時を回った。

熱斗「ん！？もう4時！？」

女性「時間ね、今日はありがとう。楽しい時間が過ごせたわ」

熱斗「こちらこそ、お世話になりました」

お礼を言って音楽室を後にしようとした時

女性「そういえば名前を覚えてなかったわね」

熱斗「え？」

女性「私の名は優座<sup>ゆうざ</sup>。また会いましょう」

その後メール達と合流した熱斗達は解散する事になった。

その帰り……

熱斗「なあロック、あの人に以前会った事ないか？」

ロックマン「というと、熱斗君も？」

熱斗「うん、なんか見覚えがあるんだよね」

ロックマン「僕も・・・なんだろうね・・・」

2人が自宅に帰る一方で、ある女性が館内で誰かを待っていた。

Ep. 36 Silent Space 4

熱斗達が自宅に帰宅途中、生涯学習センターの館内では桜井メールが1人本を読んでいた。

普通だったら自宅が近い熱斗と帰るのだが今日はそうではなかった。

しばらくの間ひぐらしの鳴き声に耳を傾けながら、読書をしていると1人の女性が近づいてきてメールに話し掛けた。

優座「遅くなってごめん！待った？」

メールは彼女の顔を見るなり、笑顔で抱きついた。

メール「お母さん……！」

どうやらメイルは日本に帰ってくる母を待つために館内に残っていたらしい。

再会を果たした2人は優座が乗ってきたレンタカーで帰り道を行っていた。

優座「にしても元気そうだなによりだわ、今日は皆で勉強会？」

メイル「え？なんで分かるの？」

優座「なんとなくよ、でもいつも自宅任せっきりでごめんね」

メイル「こっちは大丈夫、問題ないよ。お父さんは元気にしてる？」

優座「元気も何もあの人は元気の固まりみたいなものだもの！」

メイル「クスッ、だと思った」

どうやらこの親子は本当に仲が良いみたいだ・・・

優座「ところで将来の目標は決まった？」

メール「栄養士になろうと思うんだけど・・・ダメかな？」

優座「ダメじゃないわよ！いい目標じゃないの！！」

メール「そう？」

優座「メールのなりたい自分になりなさい。自分が自分に遠慮する必要なんかないわよ」

メール「・・・うん！」

優座「フフツ（^|・）」

夕焼け色に染まった空、こついつた親子の時間も貴重なものなのかもしれない。

優座「ところで好きな人は出来た？もしかしてお付き合いしてる？」

メール「別に好きな人もいないし付き合いってなんかいないよ！／／」

優座「ふ〜ん・・・光君は？」

メール「なんで熱斗が出て来るのよ！？／／／」

優座「うん．．．なんとなく」

メール「なんとなくって．．．」

優座「でも月日って経つのはホント早いよね。メールが生まれてもう17年．．．メールが赤ちゃんだった頃が私にはつい先日のように思えるの．．．」

優座の顔は何かを懐かしむような表情を浮かべていた。その顔は幸せに満ちあふれたように見える。

優座「私は正直メールも一緒に海外に連れていこうと思ったわ。一人にさせるなんてとても心配なもの」

メール「．．．」

優座「でも私は確信してたわ。私達以外にメイルを必ず守ってくれる人が近くにいるって．．．それにメイルも秋原町に住む事を望んでたでしょう?」

メイル「．．．うん．．．でもなんで私が秋原町に住んでいたって分かったの?」

メイルの問いかけに対し優座は微笑の表情で応えた。

優座「なんとなく」

Ep. 36 Silent Space 4 (後書き)

更新遅くなり申し訳ありません(;´-`)  
地震の影響でいろいろ忙しく大変でした。  
地震で被災された方に心よりお見舞い申し上げます。

ところで今回オリキャラで「優座」と言う女性を登場させました。

簡単に言うと

メールの母です ( - - )

名前は桜井優座<sup>さくらい ゆうざ</sup>

名前の付け方は

熱斗 ネット

メール メール

炎山 演算

というように情報社会の単語が名前になっているので  
優座 ユーザ  
という事にしました。

こちらの考え方では関係性のないオリキャラは出さないようにして  
行きたいと思います。

話がごちゃごちゃになる危険がありますしね。

感想待ってます。

是非とも一言で結構ですのでよろしくお願いします！  
感想を書いて頂いた方には必ず返信します。

では今後もよろしくお願いします（ - - ）

EP. 37 Because . . . (前書)

Because . . .

ある日のこと

夏の熱さはいつの間にか緩み、秋の風が吹くようになった頃。  
混みあった市民プールは賑わいをなくし、蜩の鳴き声はゆっくりと  
静まっていった。

高校生活も後半。

勉強や部活に少しずつ焦る人達もいれば、これまた違った事で少  
ずつ焦る人もいた。

事の始まりは彼女が友達と遊びに行った時の事だった。

「メールちゃんって光君と付き合ってるの?」

女子達で喫茶店で言われた一言。

メール「えっ!?!?べ、別に付き合ってるなんかいないよ!?!?」

「でもいつも光君といるじゃない?」

メール「あれはいつも熱斗と一緒に帰ったりしてるだけで . . .」

「ウソ〜！？てつきり付き合ってるかと思ってた〜！」

「仲良いカップルに見えるしな」

メール「カップルだなんて・・・」

「じゃあ私告っちゃおうかな？光君イケメンだし」

メール「（えっ？）」

メールの表情が固まり、背筋が凍った。

するとメールの表情を見かねた1人がとっさにフォローを入れた。

「やめときな〜光君の近くにもいないのにいきなりアタックなんて  
」

「だよ〜、はぁ．．．いいなぁメールちゃんは．．．私には高嶺の花だわ．．．」

メール「アハハ．．．」

引きつった彼女の顔が少し緩んだがやや不安そうな表情は変わらなかった。

翌日．．．

熱斗「おはようメール」

いつもの登校時のように制服で熱斗が来た。

メール「お、おはよう．．．」

熱斗「?どうしたの?具合でも悪いの?」

メール「え?いや、別に」

熱斗「?」

その夜・・・  
もしこの思いを言葉に出来なかったらいつかは離ればなれになってしまう。  
小さい頃からの変わらない気持ち。  
ただ「スキ」の一言が言えなかった。

メール「素直にスキっていえればなあ・・・」

ロール「そうだね」

ふとロールはメールにこんな質問を問いかけた。

ロール「ところで、メールちゃんは熱斗のどんなところがスキなの？」

メール「えっ？」

正直そんなことは考えた事がなかった。  
確かに熱斗に対して好意的感情があるのは確かだ。しかしそれがどういう理由なのか？  
メールはその答えをまだ持ち合わせていなかった。

メール「・・・わからない・・・」

ロール「それじゃ今は熱斗君のどんな所がスキなのか考える時じゃないかな？その答えが分かった時、素直に「スキ」が言えると思うよ。大丈夫、まだ1年半あるからゆっくり探していこうよ」

メール「ロール・・・」

その週の休日

熱斗は自宅で部屋の掃除を行っていた。

熱斗の部屋には昔遊んだオモチャやチップ、アルバムが大切にしまわれている。

ロックマン「にしても、何時にもして大掛かりだね、何かあったの？」

熱斗「別に何かあった訳じゃないけどさ、何となく」

ロックマン「？」

大それた部屋の掃除は意外にも速く片付いた。掃除を終えた熱斗はシャワーを浴び、部屋でアルバムを見ていた。

生まれた時の頃の写真や幼稚園の頃の写真、WWWを壊滅させた時の写真も残されている。

熱斗「こんな時もあったなあ〜よく事件に巻き込まれたっけ」

ロックマン「巻き込まれたじゃなくて、突っ込んだでしょ」

熱斗「ハハツ！確かに、あの頃は何かあるたび首突っ込んでみんなに迷惑かけたな。巻き込まれたというより突っ込んだだな」

ロックマンに突っ込まれた熱斗は、笑いながら訂正を入れる。  
相変わらずこの2人のやり取りは変わらない。まあそれが彼らの強さの秘密なのかもしれないが。

ロックマン「これは小学校卒業した時の写真だね。」

熱斗「あの時は大変だった．．．写真撮る瞬間にメイルが抱きついてきて、その直後体重を支えきれなくて派手にしりもちついたもんな」

ロックマン「そんな事いつちゃって、実際は結構嬉しかったんじゃないの、この写真の熱斗君の顔真つ赤だよ」

熱斗「別に嬉しくなんかなかった！」

ロックマン「ホントウ?」

熱斗「・・・フンッ! / /」

その後2人は、しばらくの間アルバムを見て思い出に浸った。  
ネビュラとの闘い、リベレートミッション、N1GPなど数えきれ  
ない思い出を思い出しては会話が弾んだ。

しばらくして少し昼寝をすると、外は既に夕焼け色に染まっていた。

熱斗「・・・なあロックマン」

ロックマン「どうしたの熱斗君?」

ロックマンが返事を返すと熱斗はゆっくりと話した。

熱斗「今日アルバムを見て思ったんだ．．．．．  
この世界で人が生まれて、成長して誰かを好きになる。そして新しい家族が生まれて沢山の思い出を作り、子孫が受け継がれていく。普通は当然のような事だと思うよな。」

ロックマン「人間の歴史の過程だからね」

熱斗「．．．．．だけど俺達がこうして宇宙にある一つの星で生きている．．．．．

これって本当はもの凄い奇跡なんじゃないかって思うんだ．．．もしこの星に一つの隕石でも当たったら俺達は生きてはいられない．．．

そんな不安定な世界でも俺達は幸せな生活を営んできた．．．パパとママが愛し合って結婚して俺や彩斗兄さんがこの世界に生まれてきた．．．

．．．そう考えるとこの世界の存在が凄い奇跡に思えてしようがないんだ．．．！

．．．そしてもう一つ思うんだ．．．いつかは俺も好きな人と愛し合っただなって．．．」

**Chapter 39 Inter Mission (前書)**

**Inter Mission**

## Ep. 39 Inter Mission

次の日

ロック「熱斗君！パパからメールきてるよ！」

熱斗「？パパならこの前帰ってきたばかりだけど・・・」

ロック「どうやら大手のゲーム会社の最新のゲームの披露会に招待  
みたいだよ！」

熱斗「なに！？で、続きは！？」

ロック「今日その披露会があるから今夜デンサンシティに来ないか  
だって？もちろん友達も連れてきていいって！」

熱斗「行くしかないだろ！」

ロック「最近は勉強やらなんやらで忙しかったしね、パパには返事  
のメール出しとくよ」

熱斗「ああ頼む！俺はメール達を誘ってくる！」

その日の夜デンサンシティの披露会会場ビルにて

熱斗「にしてもデカイビルだな．．．」

デカオ「にしてもゲームなんてホント久しぶりだな。高校入ってからやってなかったからな」

メール「ゲームの披露会って事はやいとちゃんのパパのライバル社  
って事かな？」

やいと「いえ、この会社は共同開発とか行ってたはずだからライバル社ってわけではないわよ。まあこの社長は結構口うるさいらしいけどww」

しばらくして光祐一朗が遅れてきた。どうやら科学省の仕事が忙しかったらしい。

祐一朗「いや、みんな遅れてごめんね、仕事が片付かなくて．．．」

熱斗「別にいいって！それより中入ろうよ！」

祐一朗「ああ！」

このビルは全69階で設計されており、エレベーターは直通で行けるようになってる。

エレベーターからはデンサンシティを一望できるようになっている。絶景としか言い様のない素晴らしい景色だ。

熱斗「にしてもなんでパパが招待されたんだろう?」

祐一朗「今回披露されるゲームの開発の手助けをしたんだ。今回開発したゲームはパルス・トランスミッションシステムに少し似ているからね」

パルス・トランスミッション

通常ナビが行き来する電脳世界に人間が行き来できるようにするシステム。

熱斗も以前WWWとの闘いの時に使った事がある。

祐一朗「だけど今回開発したものはそれよりも数段も凄いなだ!そ

うだ、皆にこれを渡すんだった」

そういつて祐一朗は4人にIDがかかれたリストバンドを渡した。

熱斗「これは？」

祐一朗「今日それを付けている人はゲームの先行体験が出来るんだ  
！」

デカオ「ええ！？本当か！？」

やいと「光君のパパさんも随分と用意が良いわね（＾）（）」

メール「パパさん、ありがとうございます！」

熱斗「パパありがとう！」メール「パパさん、ありがとうございますま  
す！」

熱斗「パパありがとう！」

祐一朗「どういたしまして そろそろ会場に着くはずだ」

## Ep.40 Inter Mission 2

会場である最上階には芸能人や大手会社の社長など日本で有名な方々が大勢出席している。

勿論、そんな人々を持って成す為の料理も沢山用意してあった。

熱斗「凄い数の有名人と料理だな・・・」

メール「それだけ今回開発したゲームが期待されてるってことなのよきつと・・・」

デカオ「それにこの料理の味付けもなかなかのもんだな・・・」

やいと「あなたはどこ目につけてんのよ」

デカオの料理に対する真剣な表情をやいとは一蹴した。  
しばらくして披露会が始まり会社の社長や開発者の話などがあった。

そして

司会「それでは今回開発したゲームのご紹介を致します！」

そう司会が話すとステージ上のカーテンが開き、その卵形の装置が姿を現した。

司会「我が社が総力を決して開発した次世代型ゲーム「Contact」です！」

熱斗「Contact？」

司会「このContactは、卵形の中に入り様々なゲームを行う事ができます。」

またこの装置は視覚・聴覚・味覚・嗅覚・感覚を忠実に再現し、現実世界と全く同じ感覚でゲームをお楽しみ頂けます。

勿論痛覚は再現しておりませんのでお子様も安心して遊ぶ事が出来ます！」

おおー！！！！

パチパチパチパチ！！

デカオ「まさにパルス・トランスミッションのゲーム版という訳か  
．．．」

メール「でも痛覚を除いた全ての感覚をゲームで再現できるなんて  
．

」

やいと「パパの会社とは違ってアミューズメント関連を狙ってるのね、なかなか侮れないわ」

司会「本来であればお客様方のナビも共にお連れする機能もお見せしたかったのですが、残念ながら披露会までに調整が間に合いませんでした・・・」

熱斗「それだけ切羽詰まってたって事が・・・」

司会「その代わりに今回は50名の方に先行体験をしていただきます！」

おおおー！！！！

パチパチパチパチパチ！！

司会「それでは下の階のコンサート会場に移動をお願いします。」

## Ep. 41 Inter Mission 3

ホテルの業務員によって下の階のコンサート会場に誘導された彼らを待っていたのは、ステージ場にセットされた50台のContactだった。

司会「IDの書かれたリストバンドをお付けの方はステージ上にある好きな機体にお乗りください」

そう言うと、先行体験者は我先とContactに走った。

やいと「別に走らなくても逃げていかないわよ」

デカオ「そういつて早歩きしてるお前は何なんだ？」

やいと「ウッ」

司会「それでは起動します！」

メール「……ドキドキ」

熱斗「……にしてもパパは本当にContactのパルス・トラ  
ンスミッションシステムの応用開発を手助けしただけなのかな？  
ただ手助けしたなら、なぜ今回先行体験まで確保してくれたんだろ  
う……」

司会「Contact・build the Inter Mis  
sion!」

・

・

どのくらいの間眠りについていたらろう。

身体が動かない。まるで朝起きるのを拒む身体のようにだ。

しっかりと目が覚めるまで身体はいうことを聞かない。これだから  
早起きは好きになれない。

「Welcome to Contact World!  
今回は先決体験にご参加頂き誠にありがとうございます。  
さて今回は4つの中の簡単なゲームから1つ体験していただきます。  
好きなゲームをお選び下さい。」

どうやらこの声は脳内に話し掛けているようだ。  
今は痛覚を除く全ての感覚を預けている。Contactにより支配されている。

そう思うと悪寒を感じずにはいらなかった。

熱斗「どれも面白そうだけど・・・まあこれでいいか・・・」

そう言ってゲームを選択すると再び熱斗は深い眠りに入った。

同時刻：現実世界  
Contactの先行体験者以外の客人は最上階で会話を楽しんでいた。

「ん？あ！光博士！」

祐一朗「おお！名人じゃないか！どうしたんだい？」

名人「今日はContactの開発援助をしたのでこの会場に招待されました。」

祐一朗「なるほどね。」

名人「ところで光博士は確かパルス・トランスミッションに似た制御部分を手助けしたんですよね？」

祐一朗「うん、そうだよ」

名人「Contactのゲームストーリーの製作者欄に光博士の名前があつたんですが・・・」

祐一朗「・・・まあ気まぐれで少しストーリーを作ってみたんだ、と言つても熱斗がそのゲームを選ぶかどうかは分からないけどね」

名人「いわゆるお遊びつてやつですか・・・」

Ep. 42 Inter Mission 4

名人「しかし今回の先行体験でプレイできるゲームは実際には発売の予定は確か無かったはず…」

祐一郎「確かに、今回制作したゲームは製品版ではないからね。」

名人「だとしたらなぜストーリーの制作に？お遊びにしては手が込みすぎでは？」

祐一郎「鋭いね、名人は。」

名人「と言うことは何か意図があるんですね…」

名人の問いかけに外の景色を眺めていた祐一郎の頬が少し上がった。久しぶりに見る絶景に微笑んだのか、はたまた名人の鋭い洞察力に苦笑しているのか…

少し間を置いて祐一郎が再び口を開いた。

祐一郎「私は熱斗が小さい頃からずっと科学省に勤めつきりだったからね…何度も熱斗に遊園地や遊びの約束をしては急用の仕事で破ってきたんだよね。小さい頃の熱斗は泣き止まなくて大変だったってはるかが言ってたなあ。そうするうちにだんだんと熱斗は大きくなっていったよ…」

名人「光博士……………」

祐一郎「でも自分が熱斗に父親として何ができたのか、何かしてあげられたのかって思ったんだよね・・・いつも二人を危険な目に合わせてばかりだったかもしれない。だから今回は熱斗のプレゼントなんだ。形には残らない・・・けどせめてこの高校生活の中で、人生の中で決して消えることのない思い出を作ってほしいんだ。別に私のゲームを選択しなかったとしても構わない。これが今のあの子にできる事だから・・・」

同時刻：Contact 仮想世界

再び眠りから覚めようとする感覚だ。今回二度目の感覚は少し慣れていた。が、やはりこの感覚は好きになれない。

ゆっくりと瞼を開くと木造の見知らぬ天井が目の前に見えた。周りは現代とは少し違い障子に畳と和風の造りになっている。そして体を寝かせている布団と薄い毛布があるだけのシンプルな部屋だ。

「目が覚めましたかな？」

部屋の戸を開けて、老人が話しかけてきた。

熱斗「ここは？」

「わしの家ですよ。それよりお腹が空いているでしょう。お食事の準備ができてますのでこちらへどうぞ。」

熱斗「あ、ありがとうございます！」

そうして老人に別の部屋に連れて行かれると・・・

メール「熱斗！！」

熱斗「メール！！」

茶の間でご飯を頂いているメールの姿があった。どうやらメールも熱斗と同じゲームを選択していたようだ。

「お知り合いなんですか？それは良かっただ〜」

老人の話を聞くとメールは二日前、熱斗は昨日道端で倒れていたらしい。

また老人が住むこの地域は都市からだいぶ離れた場所らしく、山の近くらしい。

「この家にはいつまでもいてもらって構いませんぞ。良かったらこ

の辺りを明日見てきてはどうですか？何もないとこるですが」

熱斗「じゃあ、明日この周りを見てきます。」

メール「何から何までお世話していただいてありがとうございます。」

「別に構いませんわい。人は多い方が楽しいからのう、ハツハツ！あ、ただこの家部屋が少ないのですみませんがお二人は同じ部屋でねてくださいね。」

熱斗・メール「はい、分かりました。……………え？」

その夜、一つの部屋に二つの布団をおじいさんは用意してくれた。当初は布団が一つだけだったのだが、いくらゲームの中でも若い男女が同じ布団で一夜を過ごすのはマズいので二つ用意するように頼んだ。

熱斗「……………」

メール「……………熱斗……………起きてる？……………」

熱斗「ああ、起きてるけど……………」

メール「どうやらこの仮想世界は2000年の夏をイメージにして  
るみたい、おじいさんに見せてもらった新聞の日付で分かったの。」

熱斗「2000年の夏か・・・まあ詳しいことは明日調べてみよ  
う。」

メール「うん・・・・・・・・熱斗・・・」

熱斗「ん？」

メール「襲わないでね」

熱斗「お、襲わねえよ!!!//>////」

Ep. 43 Inter Mission 5

毎年薄着になる季節の朝は蝉の鳴き声ではじまる。厚着になる季節とは対照に起きるのが辛くないのは嬉しい事だが、それでも早起きは好きになれない。

この朝の涼しさが1日続けばいいのに。そんな事を思いながら再び眠りにつこうとした。

メール「熱斗おお!!!起きなさあーい!!!」

後ろから眠りを打破ような声が...

これは早く起きないとまずい...そう感じ熱斗は自分の意志に逆らうように身体を動かした。

熱斗「おはよう...」

メール「おはよう熱斗!朝御飯もう少しで出来るからまって」

熱斗「うん...!?!?」

目覚めかけの目を擦り、彼は彼女の姿を凝視した。

いつもの格好ではなく黄緑のエプロン、腕をまくり料理を作る姿は

まさに新婚の嫁さんだ。

メール「？何か顔についてる？」

熱斗「えっ！？あっ！？いやー、何もついてないよ！うん！／＼」

そう言って急いで再び寝室に戻った。

正直、心を奪われた。

メールのエプロン姿、ただエプロンを着けていただけなのになぜこんなにも胸の鼓動が強くなってしまったのか。よく分からなかった。エプロン姿なら昔何度か見ている。しかし、今回は違う。

見た瞬間身体が火照るような感覚、そしてその姿に見とれてしまった。

その時。

メール「ご飯出来たよー！」  
彼女からの合図だ。

熱斗「しっかりしろ俺！」

そういつて頼二回叩き朝御飯を食べに向かった。

老人「本日はお二人でどこかへ？」

熱斗「今日はこの町の周りを見てこようかと思っています。」

老人「ほうほう！それはそれは！」

メイル「おじいさんもどこかへ？」

老人「わしは山に行つてきます。なーに、こんな小さな村にドロボウなんぞいませんから安心して家を空けてください。」

その後2人は各自出発の支度を済ませた。

熱斗「なにしてんだよメイルー、早くいくぞー」

メイル「はい今行く！ それではおじいさん、行ってきますー！」

老人「何も無い所ですが楽しんできてください。」

同時刻：現実世界

名人「ところで、今回光博士が関わったゲームはどんな内容なんですか？」

祐一郎「簡単に話すと舞台は2000年の夏の小さな村で色々な体験ができるゲームなんだ。敵も出てこないから、癒しゲームみたいなもんだね。」

名人「癒しゲー……ですか……」

祐一郎「うん。まあキャラクターデザインは周囲の人々を参考にしているから熱斗も見覚えがあるはずだよ」

名人「とことんやりますね光博士……」

祐一郎「もちろん！」

さすが熱斗の父親である。

## Ep. 44 Fill up your mind

同時刻：Contact 仮想世界

「待つてよ！にーちゃん！」

「早く来いよー！おいていつちまっぞー！」

蝉の泣き声が響きわたる中、子供達は我先に夏休みを堪能しようとして、何時もより少し軽いカバンを背負いながら学校から一早く飛び出してくる。

家まで全力疾走するその姿は汚れなき証拠だ。

その頃熱斗達は・・・

熱斗「ホントに何も無いな」

メイル「でも空気が澄んでいてとても居心地がいいよ」

行く宛てもなく村の周りを徘徊していた。これといった大きな施設がないこの村は熱斗達が住む世界とは大きく異なる。衣食住そのものに違いがあるのだ。

メール「私達の便利な世界もいいけど、電子機器に支配されないこの世界も私は好きかも」

熱斗「俺らの世界は便利になった反面、電子機器が周りに増えすぎてからね」

人間が便利さを求め過ぎた。それが自然に囲まれる心地よさを消し去ってしまったている。

そんな事を考えながらまた村を徘徊していると、子供達が話し掛けてきて山の中や空き地での草野球など様々な所につれていってくれた。

その日の深夜・・・

メール「・・・・・・・・・・・・・・・・熱斗・・・・・・・・起きてる?・・・」

熱斗「・・・・・・・・・・・・・・・・眠れないの?・・・・・・・・」

メイル「ううん・・・・・・・・今日の出来事を思い出していたの。釣りや草野球・・・・・・・・ホント楽しかった」

熱斗「昆虫採集はもう勘弁?」

メイル「あれは変なムシが出てきたからだよ・・・・・・・・でもまたいつかやりたいな。にしても草野球やってた子の中に小さい頃の熱斗にそっくりな子がいたよ。」

熱斗「小さい頃のメイルやデカオに似てる子供もいたな、やいとに似た子なんかそっくりだったなあ、身長もな」

メイル「クスッ、やいとちゃん怒るよ・・・」

熱斗「きつと激怒されるな・・・・・・・・」

そんな話を話し終えた後しばらくの沈黙が続き、メイルが眠りにつこうとした時・・・・・・・・

熱斗「・・・メール・・・」

メール「・・・なに？」

熱斗「・・・俺達の世界とこの世界、本当に幸せなのはどっちなんだろう・・・」

メール「・・・？」

熱斗「機械に囲まれた便利な世界を否定する訳じゃないけど・・・この世界は少し不便だけど俺達の世界にはない良さがある・・・」

メール「・・・自然ね・・・」

熱斗「そう・・・俺らの世界の自然は環境維持プログラムによって守られてる・・・自然が失われた訳じゃないけど・・・全てを機械に任せていいのかって今日思ってた・・・将来科学者になったら機械に依存しない自然をもう一度蘇らせようと思うんだ・・・」

勿論簡単な事じゃないけど、どうかな？」

メール「・・・」

熱斗「ごめん・・・やっぱり変だよ、急にこんなこと言いだしたり・・・」

ギュッ

メール「出来るよ・・・」

メールは熱斗の背中を抱き締めた。熱斗に気付かないようにゆっくりと彼の布団に潜り込んでいたようだ。

そして彼女は抱き締めた身体を離さずに耳元で呟いた。

メール「・・・熱斗に出来ない事なんて無いよ・・・昔から近くにいる私が言うんだから・・・」

熱斗「・・・うん・・・」

Ep. 45 Sky color

周りは真っ白、なにもない殺風景な空間に熱斗は立っていた。右手に何かの感触がある。

握っている右手を見ると、水色のきれいな鍵があった。

ふと目線を鍵から離すと、目の前にドアが現れた。

そのドアの鍵穴に持っていた鍵が合致した。

そのドアノブを握りしめ、その中に入った。

「ここは……」

公園にはリスの像、建物は変わっていてもこの場所ははっきりと分かる。そう、秋原町だ。

ただ熱斗の住んでいる秋原町とは少し違う。電腦のパストビジョンにも似ているが同等のものではなさそうだ。

辺りを歩いてみると、ヒグレヤ、やいとこの豪邸が消えている。消えていると言うよりはまだ建てられていないと表現したほうが正しいだろう。その場所は空地のようになっている。

しかし、それ以上におかしい事がある。町に人の姿が一人も見えないのだ。

本来の秋原町なら道端で世間話をする主婦や、ネットバトルに関する話で熱くなる子供たちがいるはずなのに。

行く当てのない熱斗は仕方なく自宅に向かった。この場所は現在とまったく変わらなかった。  
そして自宅に入ろうとした時・・・

「熱斗おおおおー！」

「！？？どうしたの？」

「どうしたの？、じゃないわよ！！昨日の子供たちが空地のほうで遊ぼつって言ってるのに熱斗したらずっとボーンとしてるんだもん」

「えー！？あゝめんめん！すぐ行くよー！」

今日の夢を思いかえしてるところにメイルが少々怒り気味に遠くから叫んでいる。

メイルの問いかけに応えた熱斗はすぐさま子供たちのほうにローラースケートで走って行った。

「（にしても今日はホントに不思議な夢だったな．．街の風景や雰囲気、こんなにリアルな夢を見るなんて．．まあどうでもいいか）」

それにしても今日はいつもに増していい天気だ。空は青色に綺麗に染まって、少しだけ雲が浮かんでる。白い色が少しあるだけでも、空の青さは変わってくる。今日の青空はそういう意味でもとても綺麗だ。

> i 2 8 8 5 3 — 3 5 5 9 <

「熱斗行くよー!」

「ってメイル、どこ投げてんだよ!」

「お姉ちゃんへタツピだな!アハハ!」

空地では午前中草野球で盛り上がり．．．

ザッバーン!!

「みんな、熱斗に向かって総攻撃よ!えい!」

「お兄ちゃん逃げるなー！おーい、誰か水鉄砲持ってきて！」

「持ってきたよ！特大の水鉄砲！」

「ちょ、みんな、やめ、息できな、ゲフツ、ゲツホ、ってホント勘弁してってー！」

午後は小学校のプールを借りてみんなで熱斗をいじりまくった．．．

楽しい時間はあっという間に過ぎて、日はもう暮れかけている。

子供たちは熱斗たちにあいさつをしてそれぞれの家に帰って行った。

> i 2 8 6 9 9 — 3 5 5 9 <

「夕暮れの空も綺麗だねー」

「夏は日が暮れるのが遅いから、ある意味夏にしか見れない空かもね。でもこれがゲームの世界だと本当に思えないよ、科学の進歩って凄いな」

「．．．ところでさ、今日なんか考え込んでなかった？なんか凄く真剣そうな顔してたけど．．．」

「え？うん．．．まあ大した事じゃないから大丈夫。にしても今日のプールは大変だった．．．」

「子供達の総攻撃受けてたしね、クスッ」

そんな今日の出来事を振り返りながら帰り道を歩いていると・・・

ピンポンパンポーン

「この度はContactの先行体験に参加して頂きありがとうございます。ありがとうございました。大変申し訳ありませんが間もなくゲームを終了させていただきます。ご了承ください。またゲーム終了後、アンケート用紙をお配りします。今後の参考にいたしますのでぜひアンケートにお答えください。」

Thank you for playing!

「もう終わりか・・・」

「でも楽しかったなあ、今は滅多にこういうことできないし・・・」

「うん、あ、そういえば」

「？」

「御飯ご馳走様でした！」

「フフッ、お粗末様でした」

・  
・  
・

「いやーホントに凄かった！モンスターが襲ってくるんだもんな！」

「あんたは途中から逃げ回ってたでしょ、でもまあ、面白かったわ」

「熱斗のパパさんホントに今日はありがとうございました。」

「パパ、ありがとう！楽しかったよ」

「みんなに楽しんでもらえて良かったよ、さあ、帰ろう！」

皆で帰る夜の空は、天の星でいっぱいだった・・・

## Ep. 45 Sky color (後書き)

初めて挿し絵(写真ですが)つけてみました。

この写真は俺の家が田舎なのでそこらへんなるべくうまく撮ってみました。

感想待ってますのでよろしくお願いします！

ところで今回パストビジョンが単語でだしました。

皆さんも知っているとおもいますがエグゼ5に出てきます。

で、ここでこの小説の時間軸を皆さんにお教えしておきます。

エグゼ1

エグゼ2

エグゼ3

ストリームまたはアクセス

エグゼ5

エグゼ6

一回エグゼ4を入れようと思いましたがアニメも好きなので変更し

ました。

またストリームからエグゼ5に続きますが、これはストリームで実はリーガルが生きてたという設定にしておきます。

色々忙しくてすみません。これからもよろしく願います！

**E p . 4 6 D a s h ( 前 書 末 )**

**D a s h**

「燃次さん！こっちの作業、片付きやした！」

「おう、ご苦労！先にあがっててくれ」

夏に打ち上げた花火の片付けを行う人達。夏と言う短い時期の為に、彼らは全身全霊を込めて作業を行う。

夏の夜に綺麗な花火を咲かせる事、それが彼らの仕事だ。

彼らはその仕事を果たすと、来年の作業に移る、次の夏の夜空にも、さらに綺麗な花火を咲かせる為に。

その夜、デンサン街の居酒屋にて

「にしても、今年の夏もあっという間でしたね。暑さは完全に退きましたし。でも今年も上手く行ってよかったですよ」

「ああ、今年も大したトラブルが無くて良かった良かった！それに俺達の花火でみんな喜んでくれてたしな！！」

ジヨッキを右手に燃次がご機嫌な様子で話す。仕事後の一杯という事でもあるのだろうが、どちらかというと今年の花火の出来の良さにご機嫌なのだろう・・・

その後、仕事仲間と飲んでいるうちに主要メンバー以外の仕事仲間は段々と帰宅していった。明日の仕事も控えている事をすっかり頭に入れていたようだ。

しばらくして燃次は軽いほろ酔い状態で話しだした。

「今年ももう秋の季節か・・・年の一回りは本当に早い・・・」

燃次の思い出に浸るような顔を見て、同僚達が話し掛けた。

「去年の思い出にでも浸っているのか？良かったら話してくれよ」

「俺、燃次さんの話めっさ聞きたいっス！」

「え、別に話すような大それた事じゃねえよ」

「そう言わず、だよなあ」

「はいっスー!!」

仲間達の押しに負けた燃次は窓に視線をゆっくりと向けて話した。  
た。

「・・・あれは丁度去年の今頃だったけかな？確かなあ・・・」

熱斗達が高校一年の年の秋頃。正確には残暑も退いた9月。燃次はその年の花火のシーズンが終わり、僅かな休日を過ごしていた。

花火のシーズンが終わったからといって仕事が休みになる訳ではない。来年の花火の準備など、仕事は山積みなのだ。すなわち休日には年に僅か。

しかし、その僅かな休みにする事がなかった燃次は自宅で「ごろごろ」しているだけだった。

「おい燃次、久しぶりの休日なのは分かるが、いつまでもごろごろしてるのは人間としてマズいだろ・・・」

「んな事言われてもやる事がねえんだもん、ああ暇だあ〜」

ナパームマンとそんな会話を何度もループさせている。いつも花火の事にしか頭がない燃次には、休日はただ家でごろごろするだけの日なのだ。

しばらくして燃次の自宅に誰かが尋ねてきた。眠そうな目を擦って玄関に向かいドアを開けると、

「よう燃次！」

「お、親方!!」

親方が自宅を訪ねてきた事に少々驚いた燃次はすぐに親方を自宅に入れた。

「すまなかったな、休日なのにお邪魔しちゃって」

「いえいえ、正直暇で暇で困っていた所でしたよ」

その後少しばかりの雑談の後に親方が自宅に来た目的を話しだした。どうやら親方が預かっている親戚の子をこの連休中にどこかに連れて行って欲しいらしく、頼みに来たらしい。暇で暇で仕方なかった燃次はそのお願いを快く受け入れた。

翌日、待ち合わせの商店街に向かうと親方の隣に小さな男の子の姿があった。

体格からして小学1年か幼稚園の年長組くらいの年だろうか、焦げ茶色の天然パーマの髪型に整った顔をしている。これは将来相当モテそうだと思わせんその顔の男の子は、左手に着けているリストバンドを隠すような仕草をして待っていた。たぶん無口な子なんだろうと燃次は感じた。

「じゃあ燃次頼んだぞ、あとこれ」

そう言うと親方は燃次に封筒を渡した。中身を見る前に気付いた燃次は、受け取れないと反応したが親方はその反応を押し切って封筒を渡し、笑顔でこの場を去っていった。

さあ困ったものだ。

男の子は空を見るばかり、相棒のナパームマンはバージョンアツプで自宅に待機している。

このままでは何も始まらない。でも何を切り出せばいいんだ？初対面の男の子に対して、何を話せばいいか分からなかった燃次はとっさに口を動かした。

「なあ坊主、銭湯でも行くか？」

.....

坊主が少々驚いたような目をして燃次の方を向いた。  
いかん、とっさに勢いで言ってしまったと思っただ燃次であったが、少しの間を置いて、

「.....うん」

男の子は下を向きながら少々恥ずかしそうに頷いた。

「はあくいい湯だった！やっぱり自宅の風呂より銭湯が一番だ」

銭湯から上がった二人はゆっくりと燃次の家に帰っていった。その時も彼は空を見たまま燃次にしゃべりかけては来なかった。

自宅に帰ると燃次は彼にナパーマンの紹介をした。

「こいつが俺の相棒の燃次郎、仲良くしてやってくれよな！」

「よろしくな！……って俺は燃次郎じゃねえ！ナパーマンって  
いう名前があんだよ！」

いつものこの会話は何時になっても変わらない。

日はすっかり沈み、外は大分暗くなってきた。夏が終わるに連れて日は段々と急いで身を隠すようになる。

「今日は疲れたし、寝るか。明日から出掛けることにすっかな」

「うん」

そうして三人は眠りについた。

・・・と思ったのだが実際は誰も寝ていなく、ただ布団の中で黙っていた。

しばらくして・・・

「・・・坊主、お前明日行きたいところあるか？」

・・・応えるわけないかと自分も眠りに着こうとした時、

「・・・父さんと母さんのところ・・・」

彼は寝言とも判断し難い声で呟いた。

「  
・  
・  
・  
よし  
・  
分  
か  
っ  
た  
」

再び日は顔を出し始め、辺りはゆっくりと明るくなっていく。

朝御飯を済ませ、出掛ける支度をした燃次達はバスに乗り、まずは少年の父親の元へ向かった。

少年が持っていた地図によると秋原町やデンサントウンからはかなり距離があり、歩きで向かうのは困難。仕方なくバスで向かう事になった。その道中、少年が色々な話をしてくれた。

「今はおじいちゃんと一緒に住んでる。お父さんの所には去年も行ったんだ。お母さんには小さい頃に会って顔は写真で見ただけ。」

「みんな仕事で忙しいんだな・・・今もおじいさんは仕事してるのか？」

「火薬を作る仕事をしてるよ。すごい元気。」

「火薬職人か、いつも世話になってるな。」

「燃次は花火を作る仕事をしてっから、火薬無しに仕事は成り立たねえんだよ。」

「花火作れるの？」

「まあ親方と比べれば腕はまだただけだな」

山中を進む事二時間、とある町についた。山に囲まれているが街の賑わいは非常に豊かで、よかよか村と雰囲気似ている。

燃次達は街でバスを降り、少年に付いていく。

街のメインストリートを通り、街はずれの坂道を歩いていくとその先に小さなお寺がぽつんと建っていた。

きっとお寺の住職なのだろうと思った燃次とナパームマンは早足の少年を追っていった。

「着いたよ」

そう言葉にした少年の前にいたのは、1つのお墓だった。

「お前の・・・親父・・・さん？」

「うん、そつだよ」

啞然とする燃次に反して少年は、お供え物や線香の準備をてきぱきと行う。

花が添えてあつたところを見ると誰かが先に墓参りに来たようだ。

「去年は夏に来ただけだけど今年はじいちゃんが忙しくて夏に来れなかつたんだ。」

そう言つてお墓に手を合わせる少年。これといった表情もせずにごこまで来た。悲しくないのか？寂しくないのか？今の燃次には解らなかつた。一方のナパームマンは帰り際に・・・

「・・・・・・・・・・？」

その日はだいぶ太陽も偏つてきたので街の民宿に泊まる事にした。

この街の郷土料理なのかどうかは分からないが、沢山の珍しい料理が晩飯に並んだ。  
勿論、成人である燃次に酒が回らないはずがなかった。

「・・・もう飲めねえ／＼／」

そう口にした燃次はまた半分も残っている料理をそっこのけで窓側に敷いてある布団に横になった。相当疲れていたのだろう、横になって数秒でいびきをかいている。

そんな燃次を見て、少年はテレビの音量を少し下げた。晩飯を食べているとテーブルに置いてあるPETから声が。

「おい坊主！悪いけどPETをスタンドに立ててくれ！」

そう言われ少年はテーブルに横になってたPETを充電スタンドに刺した。

「すまねえな、アイツ酒が回り過ぎるとあんな感じになっちまうんだ。今日は寝かしといてくれ。」

その後晩飯を済ましてテレビを見ていると再びナパームマンが話し掛けた。

「親父さんはどんな人だったんだ？」

直球すぎる質問だったが少年は答えた。

「少し頼りなさそうな感じだったけど本当はとても優しくて、頼りがいがあった。」

「・・・・・・・・」

「病気で死んじゃったけど父さんは死に際に強く生きろって教えられたよ。だからもう寂しくないよ。」

「そうか・・・燃次と似たり寄ったりなんだな。」

「燃次兄ちゃんと？」

ナパームマンは少し間を置き、ゆっくりと話しました。

燃次が小さい頃に両親を交通事故で失った事。

燃次の親戚が少なく引き取り先が見つからなかった事。

そんな絶望的な状況の中、今の親方が燃次の引き取り先になってくれた事。

そして、犯罪者だった自分を燃次が自分のナビとして受け入れてくれた事。

「そんな事があつたんだ・・・」

「まあアイツの事だから今は気にもしてねえと思うがな・・・でも今のおまえの気持ち、燃次ならきつと理解してくれるはずだ。だからもつと・・・」

「もつと?」

「楽しもうぜ。せつかくの連休なんだからよ!」

「!・・・うん!」

少年は今までで一番の笑顔で返事をした。

「よし!じゃあ今日はもう遅いし寝るぞ」

「うん、おやすみ燃次郎」

「だから俺は燃次郎じゃねえ!!!!!!」

Ep. 49 Second day

キラキラと輝く太陽。

周りに響き渡る蝉の鳴き声。

雲一つない蒼い空。

これが残暑が退いた9月の天候なのか？と脳裏に浮かばないはずはなかった。

この暑さを少しでも抑えようと家の前で打ち水を撒く人、この天気を利用して沢山の洗濯物を干す主婦、外で水鉄砲片手に友達とガンマンごっこをして遊ぶ子供達、せつかくの休日が無駄にはせんと外には出ずPETで様々なニユースを寝っころがり確認していることであるうその父親。

その日の天候に応じた暮らし方をする人間の本能は、現代の科学技術が発展したなかでも変わっていない様子はなさそうだ。

父親に会いに行く目的を果たした彼らは、少年の母親の元へ向かっていた。一度デンサンシティに戻った彼らはそこで一晩過ごし、少年の持っていた写真の裏に書いてある住所へと向かっていた。

写真はこの夏に少年の家に送られてきたそうだ。父と母らしき人が寄り添い、母は赤ん坊を大事に抱えながら微笑んでいる写真、家にも何枚か写真があったからすぐにこの女性が母だと分かることのできたらしい。

デンサンシティからメトロを乗り継ぎ、たどり着いた先はとある町。都会でもなく田舎でもない平凡な街、しかし肝心の住所が難しいところにある探し出すのは困難を極めた。地元の人に聞いてみても分かる人は少なかった。聞き込みを続けてようやく町外れの人の情報でようやくその住所がどこなのか分かった。

町の中心部に密集しているマンション、そのなかに一つだけ場所が離れた一棟、P E Tの検索エンジンにも当てはまらない所があった。決して町外れではないのになぜ検索に当てはまらなかったのだろうか？そんな事を頭の隅に置き、そのマンションに向かった。

「スンマセン、この住所はこのマンションですよ。」

「拝見します．．．あ、これはこのマンションが建てられる前の住所ですね今のこのマンションと同じところにあったんですよ。」

「ってことは前に住んでた人はもういないってことツスカ!？」

「いいえ前に住んでた人は今もこのマンションに住んでますよ市の合併によるマンションの建て替えだったので。きつと市の合併で住所が変わってしまったのかもしれない、この住所は．．．4階の207番ですね」

その時、1階のエレベーターが開き、沢山の住民が出てきた。多くの住民が住んでいるのでエレベーターの大きさも通常より大きいようだ。マンションのコンシェルジュはその中からある女性をさして、「あの方が4階の207番の方です」

その手の先にいた女性、長い髪をポニーテールにまとめて左目の下には泣きぼくろ、綺麗な服を着てスタスタと歩いていく。

間違いない、母さんだ!

そう思った少年はその女性に向かつて走り出した。今まで見せたことのない本当の一番の笑顔だ。そんな顔を見て燃次とナパームマンも顔を緩めずにはいかなかった。母親と会える、そう思って走って行った。

そう、そのはずだった。

少年は走るのをやめて燃次たちの方に戻ってきた。ん？どうした？なにか落としたのか？怪我でもしたのか？なんで戻ってくるんだ？そう思って首をかしげる燃次達だったが、なぜ少年が戻ってきたのか答えを知るまでの間に時間は無かった。

エレベーターから出てきた人達が少なくなっていくとその女性は誰かと手を握っていた。よく見ると・・・小さな女の子の手を握っている。幼い3歳児といったところだろうか。

歩き疲れた3歳児を肩車したのは母親・・・ではなくその隣にいた男性だ。ひょいっと女の子を持ち上げ3人で外へ出て行った。

．．．．．なんぞなの？

僕の母さんは？なんでほかの家庭を持っているの？遠くで仕事して  
るはずじゃなかったの？父さんが死んだから仕事してるってじいぢ  
やん言ってたけど．．．

．．．悔しい．．．悲しい．．．虚しい．．．寂しい．．．

「おい！坊主！！どこ行くんだ！？」

燃次に向かって歩いてきていた少年は、急に向きを変え、マンショ  
ンの外へと走り出していった。

一目散に走る少年の足は止まることはなく、どこまでも走っていた。あまりの少年の速さに燃次は彼の姿を見失ってしまった。

「あの坊主．．．どこ行っちゃったんだよ．．．はあはあ．．．」

「とりあえずこな市内を探そうぜ、まだ小学生だ市外にでる体力もなければ金もないはずだ。」

ナパームマンの言う通りいくら足が速くてもまだ小学生、まだ遠くには行っていないはず．．．だがもし事故や事件に会ってしまったらただ事ではすまされない．．．

「とりあえずまずは市街地から探そうぜ！」

少年は走りに走った、今どこにいるのか分からないくらいに。初めてきた所なのだから分かるはずもないのだが。やがてその足の速さはだんだんと緩んでいき、ついには立てなくなってしまった。太陽は空を段々とその青さから綺麗な夕焼けに染めはじめた。いつもならこの空に心を洗われるはずなのだが、今日はそうではなかった。

刻々とその夕焼け色の濃さを増す空は、少年を不安にさせるには十分だった。

帰れなかったらどうしよう．．．燃次兄ちゃんに会えなかったらどうしよう．．．もしこのまま彷徨うことになったら．．．そんな事が脳裏に浮かぶとその足はもう動かなかった。

そんな時、伏せていた頭の方から掛け声がした。

「どうしたノ？こんなところで座り込んで」

その優しそうな声に惹かれ、少年はそつと頭を上げた。

市街地、海岸、路地裏、あちこちを必死に探した燃次だったが今だに少年を見つけることはできなかった。綺麗だった夕焼けはもう夜空に変わっている。前日これが9月の季節かと疑問が浮かんだが、ながちこの季節は間違っではないようだ。

太陽は夏の間だと通常より日が長く顔を出す、しかしその季節が過ぎると日は段々と顔を出す間が短くなる。

つまり夏を過ぎて冬に近づくほど速く日が落ちてしまうのだ。

急がなければと思いつつも身体がもう言うことを聞かない。足はパンパンに膨れ上がり、痛みが続くあまり感覚が分からなくなっている。

市街地の道を歩いてきた。今日何度も通った道だ、ナパームマンの指示に従って何度も走り抜けたと思いつながら、歩いているとい匂いが。

晩飯であろう炒飯の炒めた匂いが燃次の鼻に察知される。美味しそうだと思いつながらも、周りを見渡しながら少年を探す。

スーパで明日の準備を行う人・・・カップルでオシャレな店でデ

イナーを楽しむ人・・・花屋の中でご飯を食べる女性と少年・・・

「・・・！？おい燃次！？スルーするなよ！いたぞ！」

「？いたぞつてなにが？」

「寝呆けてんじゃねえ！！！！今あの花屋に坊主いたぞ！？」

「へっ・・・え！？」

もう走れないはずだった足を走らせもう一度花屋の前に戻った。そのドアをやや強引に開けると、そこに晩飯を食べる少年とジャスミンがいた。

突然の出来事に身体を静止した二人だったが、

「坊主！！よかった！探したぞ！」

燃次の掛け声に安心したのか、目から大粒の涙を流して燃次の身体に飛び付いた。燃次の大きな身体に顔をめり込ませ今までに聞いた事のない大きな声で泣いた。

「グスツ・・・ごめん・・・なさい・・・グスツ」

「何謝ってんだよ、別に悪いことしてねえじゃねえか。」

少年は燃次と一言交わすとさらに大きな声で泣いた。少年の頭をク

シャクシャに撫で回して抱きしめると、泣き疲れたのかだんだんとその声は小さくなっていった。

「あの子はもう眠ったアルよ。」

「おう、すまないな、先に風呂入っちゃまって泊まらせてもらうなんて。」

「別に構わないアル、それに一人でも二人でも変わらないアルし。」

燃次達は今晚ジャスミンの家に泊まる事になった。

少年を寝かしつけたジャスミンはハーブティを入れて今日の出来事を教えてもらった。

「そんな事が会ったアルか．．．ちなみにそれって本当の母親なアルか？」

「写真を見る限り間違いないじゃなさそうだ．．」

「そう．．．」

少しの沈黙の後に燃次は再び口を開いた。

「俺明日、一度あいつの母親に行ってみるわ」

ハーブティを飲んでいたジャスミンの顔が驚きの顔に一変した。

「燃次本気アルか！？もしそれで少年が傷つくような事態になったら．．それにその母親があの子の連れと信じてくれるかどうかさえ分からな」

「それでも行かなきゃならねんだ。」

ジャスミンの言葉を押し切り燃次は答えた。

「このまま仕切りのないままでは、アイツがこの先育っていく中で一生心残りになる気がしてならねんだ。それに、もしアイツ傷つくような結果が待ってたとしても、一生心残りになるよりはいいと思うんだ。」

「．．．．．」

そして再び沈黙の間が続いた。深夜の時計が刻々と針を動かす。花のいい匂いと少しだけ薬の匂いが漂っていた。先に口を動かしたのは、

「よしっ！じゃあ明日いつてくるネ！」

「いいのか？」

「少年のためアルもの、どんな結果でもそれを受け入れるかはあの子次第、心残りには出来ないアル。あの子は私が世話するから行って来るネ！」

「ジャスミン……すまん……」

二つの時計の針が今ゆっくりと真上を指した。

翌日。

少年をジャスミンに預けて向かった先は例のマンション。早すぎず、遅すぎず、迷惑にならない時間を考えて10時半にお邪魔する事にしました。

玄関のボタンを押して「ピンポン」と鳴るチャイム音。しばらくして母親らしき女性が出てきた。

「えーと、どちら様でしょうか？」

「あの、ある坊・・・いや、ある少年の母親を探しに来たんですが、このリストバンドに見覚えはありませんか？」

「?.....!これは!??」

「少年が昔からお守り代わりに着けていたものなんです。今日までずっと大切にしてきたそうです。」

「.....良かったら中にあがって下さい」

そう言われて燃次はその場に身を任せるようにその部屋にお邪魔した。どうやら例の男性と女の子は外出しているようだ。

「翔都は確かに私の息子です・・・しかしなぜこんなところに?」

「休みの間だけ預かる事になったんです。それでどこ行きたい?つてきいたら両親がいるそれぞれの所って答えてくれました。」

「わざわざ……」

「もしよろしければ翔都君の事、話してもらえませんか？」

「……分かりました……すべてをお話しします。」

少年の母親はどういう行き先でこのような状況になったのか全てを話してくれた。

少年の母親は父親が他界する以前から仕事の事情で遠くで働いていた。その後、少年の父親が他界した。しかし母親は遠くで働いているために息子である翔都の世話ができなかった。

そんな時、ある話を持ちかけてきたのが火薬職人である少年の祖父だった。母親の義父である祖父はこう話してくれた。

「新しい家庭を作っても構わん。母親一人で遠くから息子を世話して育てるのは大変じゃ、それにあんたもまだ若い。……もう一度家庭を作り直す時間はあるはずじゃ。死んだ息子もきつと反対せんじやろう……翔都には遠くで働いていると言っておくぞ、悲しい現実を知るにはまだあの子はおさなすぎる」

母親その話を聞いて反対した。それじゃ母親をやめたようなもんじやないか、母親失格だわと話した。すると義父はこう話してくれた。

「別にあんたを母親失格にするわけじゃない。むしろ立派な母親だとわしは思っている。だからこそもう一度幸せになってほしいのじや。」

そう言っただけしばらくの沈黙が続いた。その後、ゆっくりと義父が語りだした。

「・・・火薬というのは怖いものじゃ・・・火を付ければ綺麗な花火を咲かせる事が出来るのに、一度水に濡れてしまえば使い物にならなくなってしまう・・・でも人間にはやり直す力がある、それが人生というものでもあるのじゃ。翔都はわしが必ず立派に育てる、約束しよう。」

これからの翔都の事、自分の新しい家庭、そこまで義父は真剣に考えてくれていた。母親はこれ以上義父と翔都に迷惑をかけまいと、その話に首を縦にふった。

「って事だったらいい。」

所変わってジャスミンのお店、午後一時位。

昼食を食べて満腹になった少年は満足したのか二階でお昼寝してるらしい。

「それは今の旦那さんも知ってるアルよね？」

「ああ、ちゃんと理解してくれたい。あと一応俺ら明日の午後一番乗りのメトロで帰る予定だから、もしよければ翔都に会ってくれって伝えてきた。」

燃次が飲み干したお茶のカップにジャスミンがまたお茶を注ぐ。

「明日には帰るアルか・・・それじゃ3人でどこか行かないアルか？」

「え？」

「このまま悲しい気持ち引きずるより二度と忘れる事のできない最高の思い出にするネ！」

「確かにそうさせてやりたいが・・・」

燃次が迷いを見せていた時、ジャスミンのPETからメデイが話しました。

「この近くにも遊園地ぐらいあるわよ、それにクルーズもあるし、行きましようよ!。」

ジャスミンのPETの声に反応したのか、もう片方からも、

「なに迷ってたんだよ!せっかくの休みだ!!パーッとやろうぜパーっと!!!!」

「・・・そうだな！よし坊主が起きたら行くぞ！」

しばらくして翔都が起きてきた。燃次は出かける前に翔都に話した。

「今日お前の母親らしい人に会ってきた。」

少年はその言葉を聞いてすっと目を逸らした、あまりいい話ではないと思っただろう。

このまま真実を話していいのだろうか？少年に伝えていいのだろうか？様々な困惑を頭に詰め込みながらも口を動かした。

「そしたら・・・別人だった！」

「えっ？」

「聞いたらこの市街地のどこかに引越したって。」

「そう・・・」

「でもその人親切だからお前の母親に連絡して、明日来てもらえるように伝えておくってさ！」

「え、本当？」

「本当だ！！それともうすぐ出かけるぞ！遊園地だ！！」

「・・・うん！」

2人の会話を壁越しに後ろ向きで聞いていたジャスミンは、

「燃次・・・そうアルよね・・・」

ふと呟き、意味ありげな微笑をとった。

「ジャスミンなにしてんだ〜？行くぞ〜！」

「分かった！すぐ行くアル！」

燃次の呼び掛けに答えジャスミンは急いで玄関に向かった。

その後3人は遊園地で思い切り楽しんだ。ありとあらゆるアトラクションに乗っては目を回し、驚き、そして笑った。あつという間に時間は流れて夜になった。

夕飯は船の上で食べるディナークルーズ。食べてる途中に、

「仲のいい家族ですね！一枚どうですか？」

「え！？いや、俺らかぞ

」

「本当！？じゃあ一枚お願いアル！ほら、燃次も翔都もこっち集まるネー！」

写真をとってもらった後二人の顔が少し赤い。それを見た少年。

「二人とも顔を赤いけど大丈夫？」

「べ、別に赤くなってねえよ！気のせいだ／＼」

「そうアルよ！ちょっと疲れただけアル／＼それより見るネ！凄い綺麗アル！！！」

> i 3 1 8 4 0 — 3 5 5 9 <

三人の前に現れたのは月明かりに照らされた海。綺麗なカーテンのようにヒラヒラと揺れているようだ。

P E T 内にて、

「まるで本当の家族みたいね」

「まあ、将来あいつらがあんな風になるといいんだがな・・・」

「あら、案外難しい事でもなさそうよ？」

「・・・まあそうかもな・・・」

「でしょ」

翌日、連休の最終日。

燃次達3人は午後一番乗りのメトロに乗ってデンサンシティに戻る準備を済ませ、市街地の駅に向かった。本来なら2人で向かうはずだったがジャスミンがコトブキ町まで用事があるようなので一緒に向かう事となった。

思えば様々な出来事でいっぱいだった。亡き父の元へ向かい墓参りを済ませれば、母親が再婚していたという事実。少年には知られていない、いや、少年にはまだ早すぎる事実・・・そんな中で作ってきた沢山の思い出、遊園地、旅館先での出来事、燃次と乗ったバスやメトロは普通のような事だと思うが、それも新鮮な体験だったと少年は心の中で思っていることだろう。

『この度はメトロラインをご利用いただき、誠にありがとうございました。次回のデンサンシティ方面メトロ610号は13番線ホームからのご乗車となっております……』

> i32183 — 3559 <

駅のアナウンスとともに様々な人の声が混ざり合っている。降りる人、乗る人、お土産を買う人、一人一人それぞれの目的があつてこの駅に来ているのであろう。

今日乗る便まではまだ時間があるので屋上の休憩スペースで腰を下ろしていた燃次。ジャスミンと少年はお土産を買いに行っている。はたして母親は来てくれるのか、少年は会えるのか、様々な思いを空にふんわりと浮かんでいる雲を覗いては落ち着けないその心を静ませていた。遠くからジャスミンと少年が手を繋いでエスカレータ

ーに乗りこつちに向かつてくるのが見えた。おお、立派な母親だと思わせんばかりの様子とその容姿。

現在は日本で花屋を営業しつつ薬学の勉強もしているらしい。本来なら熱斗達とそんなに歳は変わりないのだが、仕事もしている点も見ていると、彼らより一層大人に見えてならない。

その後、再び二人と合流して、しばらく母親を待った。

ピーンポーンパーンポーン？

『大変長らくお待たせいたしました。13番線ホームよりまもなく12時06分発デンサンシティ方面メトロ610号が到着いたします、なお駅に到着次第、メトロ内の掃除を行います。しばらくご乗車をお待ちください。なお12時23分発……』

が、結局母親が姿をあらわす事はなかった。13番線ホームに向かう少年の表情はまるで何か心残りを残した寂しそうな、そんな表情だった。燃次、ジャスミン、ナパームマン、メデイの4人も眉間にしわを寄せてとても複雑そうな表情、例えるなら絡まった糸を解こうとするが、どうやっても解くことができない、そんな表情だ。そして掃除を済ませた従業員が出てきて乗車客が車内に乗り込もうとしたとき、

「翔都！！」

声に反応して振り返った彼らの先に現れたのは、ショートカットの綺麗な髪に足を長く見せるジーパン、そして左目の泣きぼくろ。

マンシヨンの時の女性とはかなり印象が違うが間違いない、少年の母親だ。少年はその女性を見つめ、もう一度自分の名前を呼ばれる

と、我慢していた感情抑えられなくなり、母親に飛び込んで行って号泣した。大丈夫だよと息子をなだめる母も目が赤くなっていた。

「親子の感動の再開だな！良かった良かった！」

「とかなんだ言って燃次、目が赤くなってるアルよ」

「そんなお前なんかもう泣いてるじゃんか！」

「こ、これはあくびで出たアルね！」

その後、少年の母は2人にお礼を言ってお土産を渡してくれた。少年は一回り大きい紙袋、中身は車内で見てほしいのこと。お別れの際母親はずっと手を振っていた。負けんとばかりに少年も思い切り手を振った。燃次にぶつかろうがお構いなしに手を振った。

「翔都・・・またね・・・」

車内では疲れ切った少年がぐっすりと寝息をたてている。ようやく落ち着いたのか、いい寝顔をしている。スツと少年の紙袋から新聞紙で包まれた小さな花束が。

「あら、シオンじゃないアルか」

ジャスミンの発言に反応したのは、これまたいい寝顔をしている燃次のPETから、ナパームマンだ。

「シオン、この花の名前か？」

「うん！今頃に咲く花アルよ、花言葉は「思い出」「君を忘れない」だったネ。」

「・・・そうか、だから供えてあったのか・・・」

「?どうしたの?妙に笑ってるように見えるけど・・・」

「別に、なんもねえよ。」

3時間ほど経ってデンサンシティに到着した。ジャスミンはここから乗り換えでコトブキ町に向かうそうだ。

「それじゃ、また3人で遊ぼうネ！」

「ちよつとジャスミン、3人じゃなくて5人よ！つたく．．．」

「まあまあ、今回はホント世話になったよ、アリガトな」

「持ちナビの存在忘れんなよな、じゃあな」

「おねえちゃん、ありがとう！ばいばい！」

そう言っただけで彼らはメトロラインの出口へ向かった。

「．．．ジャスミン．．．泣いてるの？」

「．．．．．また皆で遊園地いくアル！！」

「もちろん！」

ジャスミンと別れた彼らはとある川辺の橋を渡っていた。川辺では釣りをしたり、日向ぼっこをしたり、いつもの町の風景だ。向こう側には彼の祖父が待っている。橋の中心ぐらいまで来た所で、

「じゃあ俺らもここで別れだな！またお前の母さんに会いに行こうぜ！もちろんジャスミン達も一緒にな！」

「うん．．．．．燃次兄ちゃん．．．」

「ん？どした？」

またちよつと目を赤くしていた少年だったが、

「ありがとう．．．．．」

「．．．．．」

燃次はおもむろに少年を抱きしめた、少年の頭をしわくちやにして耳にささやくように、

「いつか大きくなって自分には想像もつかない事があると思う。でもそれが人間だ、だから人間って奇妙で不思議で面白いんだよな．．．だから今を一生懸命楽しく過ごせよ、な？」

「．．．．．うん」

「よし．．．いい子だ．．．」

「うん！燃次朗もありがとう！」

「だから燃次朗じゃ．．．ったく仕方ねえな、ほらあっちでじいちゃん待ってるぞ！」

「ほら！早く行きな！」

「うん！」

そう返事を返して少年は祖父の元に一直線に走り出した、紙袋は大きいけれどそんなの気にしない、後ろを振り向く余裕はない、いや、振り向かなくてもいいんだ、また会うんだもの。

「．．．じゃあ俺らも帰るか！」

「おう！！」

こうして彼らの忘れられない時間の幕が閉じた。

．．．．．さん．．．ん．．．！

ね．ん．．さん！

燃次さん！

どうやら飲み過ぎたか、居酒屋の畳で寝そべっていた。どうやら閉店の時間までずっと熟睡してたらしい。仲間の一人呼びかけでようやく起きることができたが、足元が落ち着かないため仲間の一人が家まで送って行ってくれる事になった。

「わざわざ悪いな．．．」

「いいえそんな、それに燃次さんの話も聞かせてもらっただし。はい、着きましたよ」

燃次は自宅に着くとそのまま寝転んでしまった。寝たら最後、燃次はしばらく起きない。

「ちよつと燃次さん！ここ玄関です．．．ってなんだこれ？」

玄関の右側には新聞で包まれたシオンがあった。

## Ep.52 River side (後書き)

今回で燃次編終了となります！

アニメやゲームやってきた中で燃次とナパームマンのコンビが一番と言っているほど好きです。男気があっても本当は優しくいいキャラしています。

今回写真を多用しましたがやっぱり写真だと物語と少し差が出てしまうので、もう一度考えていきたいと思っています。

なお、今回の物語は1999年(多分)に公開された「菊次郎の夏」という映画を参考にさせて頂いています。面白おかしくても切ないストーリーが印象に残っています。見て頂ければ参考にさせて頂いた部分があると嬉しいです。(結構被ってたと・・・(汗))

なお。今回の題名であるEp.52「River side」はこの映画で使われたBGMの題名です。多分この曲聞いたことのある人多いと思います。(summerという曲から編曲されています。一応URL張っておきます。

<http://www.youtube.com/watch?v=7-WIBYLXR8s>

この曲を聴いて頂けると今回の物語の世界観が広がると思います！

感想お待ちしています、一言でもアドバイスでも大歓迎です、もち

ろん送っていただいた方にはこちらから返信させていただきます。  
それではこれからもよろしくお願いいたします！

少しばかりしぶとく残っていた暑い日は完全に消え去り、秋への衣替えを済ませた。それは人々も一緒に服装を一変させる。

今年の秋原町も綺麗な紅葉を見せている。この季節になると近所のおじさんが落ち葉を履き掃除に来るのは昔から変わらない。

通常、部活動を行っていない熱斗は図書館で勉強する事が多い。入学当時は運動神経の良さと世界を救った事で名が知れ渡っていたので幾つもの部活動のスカウトが来た。

しかし本人は勉強を置き去りにして部活は行えないと考え、どの部活動にも所属しなかったそうだ。

そんなこんなで今日も学校の授業を終えて、図書館で勉強する彼の姿が。

「あんまり勉強すると疲れるよ」

そう言っただの側に温かいココアを置く。それに反応して彼はペンを置く、一休みする証拠だ。

彼らはこの建物に夏にも何回か来たそうで、この静かな空間が気に入ったそうだ。

渡されたココアを一口含み、熱斗は話します。

「もう高校生活の半分が終わったのか、月日は本当に速いよね」

「それに似た事先月も話してたよ、でも本当よね、高校に入学して

一年半が経ったんだもの・・・」

「残りの時間も無駄にしないように過ごさないと・・・そうそう、先週またやいとと火山がさあ・・・」

一言彼に返すとさらに話題を広げて帰ってくる、それをメイルはうんうんと耳に通す。これがいつもの流れになっている。小さい頃コンパネに閉じ込められた話、お兄さんとロックマンについての話など様々な話を聞く度に熱斗の出生を知った。

「ねえ熱斗・・・」

「ん？どうしたの急に改まって？」

高鳴る鼓動を抑えて、固く閉ざされた口をゆっくりと開く。言える。今なら言えるはずだ。その想いを声にだす。

「あ、悪い今日用事で科学省に行くんだった。じゃあはずだった。」

「えっ！？あ、うん分かった、じゃあね」

そう返事を返すと彼は急いで走り去っていった。その姿はローラースケートを滑りこなしていたあの頃と変わらない。

「もう、メイルちゃん今ので28回目だよ！いつまでも言えないままだと本当に誰かに取られちゃうよ！」

今月の告白しようとした回数をしっかりと数えている。本当にマメ

だなあと思いながら荷物をまとめる。

「・・・だって言おうとすると声は出なくなるしあっちだってどっか行っちゃったんだもん・・・」

やや赤く染まつた頬を膨らませ答える。思い通りに行かない自分への歯痒さなのか、それとも相手に対する恥ずかしさなのか。それは本人も理解するには難しい問題だ。

日は以前と比べてだいぶ速い時間に落ちるようになってきた。メイは帰る前に本を一冊借りていく事にした。膨大な数の本を所持する図書館の中をメイはやや早足で回る。いつも帰る前に寄っているのだ。

その時、奥にあった古い小説に目を付けた。いつもはこんなに奥の場所にある本を借りたりはしない、だからこそ今日は特別だった。何かに招かれるようにこんな奥に来たメイはそつとその本を手に取りカウンターまで持っていった。

深夜。ふと目を覚ましてしまったメイ。眠ろうにもなかなか寝つけないでいた時、ふとメイは図書館で借りた本を手を取った。

カバーは赤と白の二色。ベッドの側にある電気スタンドを付けて、メイはその本をそつと、開いた。

本を読み始めて30分くらいたった頃だっただろうか、メイがその本を熟読していた時、ロールが目を覚ました。

「眠れないの？」

「うん、あ、明かり眩しかった？ごめんね、今消すから」

そう言って明かりを消した。

「．．．小説どんな話だった？」

暗闇の中でロールが声をかける。

「まだ序盤までしか読んでないよ．．．でも不思議な本だよ、作者名は書いてないし出版社名も記載してない。」

「そんな本よく残ってたわね．．．少しだけでいいから話してよ」

「まあ少しでもいいなら．．．」

そういつて読んだ所までの物語を話した。

## Ep. 54 Old remembrance?

一方図書館を後にして科学省に向かった熱斗はというと、ロックマンのメンテナンスを行っていた。

以前巻き込まれた事件で歪んだ次元の先の人に助けて貰った際、ロックバスターのアームデータをお礼として渡した。

幾つもの事件を経て戦闘経験値を積み重ねてきたその武器は、もう自分達には必要無いと感じ、渡したという。

「・・・よし！メンテナンス終わったぞ、熱斗。あ、悪いんだがこの本を図書館に返してきてもらってもいいかな？」

「ありがとう、本は明日でもいい？」

「ああ、明日までに返してくれれば大丈夫、頼んだよ。」

祐一郎の頼みごとを引き受けて彼らは科学省を後にした。メトロに乗り秋原町の駅を出た先に待っていたのは月明かりが照らし、幾千もの星が光る夜空。

「今日は久しぶりによく見えるね」

「ここ一週間は天気がよくなかったからな」

おもえば新しい月に入って一週間は曇りや雨が続いていた。枯れ葉が落ち、雲が日と月を隠し、雨がその葉を濡らす。そんな天気になんか気が滅入っていたのだ。そんな彼をロックは苦労しながらもなんとかフォローしていた。

「またいつかみんなと天体観測したいね」

「ああ、来月にでも誘ってみるかな？雪が降らないうちに」

「いいね、そして良い雰囲気な所でアタックとか」

「え？それはどうゆう・・・」

熱斗が疑問に思いロックの顔を見る。舌をベーツと出して満面のニコニコ顔。からかっているのか応援しているのか……

「……別に下心で誘おうとしてる訳じゃねえぞ……」

「分かってるって、だっていつも良い雰囲気にいるのに動かないんだもん。」

無理して平気な顔を取り繕う熱斗。でも頬を赤く染めているのはどうしても隠せていなかった。

「別に雰囲気とかそういうのを作ってる訳じゃないんだって！だいたいロックはどう思っているんだよ！ロールのコト！」

「え！？僕は仲良しの友達だと思ってるよ！」

これまた満面の笑顔で返してくる。勿論、顔は真っ赤になっている。

「（……兄弟揃ってわかりやすい反応だなあ……）」

渋々その事実を受け止めながら自宅へ足を進めていた。

エネルギー不足・公国軍と抵抗軍の戦い・様々な事が入り交じる混乱の時代に少女は生きていた。公国軍に和解を求め、必死に生きていた。そして彼女は公国軍に追われている途中、ある1人の少年と遭遇する。まるで永遠の眠りについていているように彼は封印されていた。そして彼女は彼を目覚めさせるのであった・・・

「・・・随分深刻そうな話ね」

「まだ序盤だから何とも言えないけど・・・もう少し読んでみる」

本の世界観に入ったのか、それとも気になって眠れないのか。夜中にも関わらず彼女は背中を天井にむけ読書の続きを始めた。恋愛モノでもミステリー小説でもない、それなのになぜかこの本に興味を惹いてしまう。ついつい次のページをめくってしまう。それが原因で次の日風邪をこじらせて学校を休んでしまうことなど彼女はまだ知るはずもなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4964q/>

---

ROCKMAN EXE ~ After Road ~

2011年11月16日21時03分発行